とある魔法の妖精尻尾（フェアリーテイル）

上やん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔法の妖精尻尾（フェアリーテイル）

【Ｎコード】
Ｎ０８７７Ｙ

【作者名】
上やん

【あらすじ】
不幸な男「上条当麻」の右手にはただ一つの異能の力が宿っていた。幻想殺し（イマジンブレイカー）それが異能の力なら、神の奇跡だろうが、どんな魔法だろうが、触れただけで破壊することができる力。上条当麻が幾多の幻想を殺した先に何があるのか？
妖精の尻尾と幻想殺しが交差するとき、物語が始まる！！

プロローグ（前書き）

初心者ですが、よろしくお願いします。頑張って書いていきたいと思います。

プロローグ

世界には魔法があふれ、魔法を生業にする者（魔道士）もいる。
そんな世界の東洋の国に、一人の少年がいた。

少年の名前は、「上条（かみじょう）当麻（とうま）」。
彼は普通の少年だった。外見も特に特徴もなく、性格も普通の少年だった。
だが、たった一つだけ彼には他の人とは違うところがあった。

少年は、

『不幸』

だった。

少年の周りでは、相次いで『不幸』な出来事が起こる。それが少年の日常だった。そんな少年を周りがどんな目で見るかは火を見るより明らかだ。周りの子供たちばかりでなく、大人たちでさえ少年を遠ざけていった。少年が離れれば、『不幸』も遠ざかる。そんなバカげた話を誰もが信じ、少年には居場所が無くなっていた。

そんな少年を心配した両親は、少年と共にそこを離れることにした。『不幸』を気にすることがなくなるかもしれない新しい場所、魔法が盛んな国「フィオーレ王国」に。そうすれば少年にも幸せが訪れることを願って。

しかし、そこでも少年は『不幸』な人間として扱われ始めてしまう。

ついに見かねた両親は、彼を見捨てることを決断してしまう。
当然、両親を失った少年は生きるすべを失い、途方に暮れてしまう。
そんな時に、少年は思う。

『不幸』だと。

しかし、運命は少年を見捨てはしなかった。少年の人生にとって、
運命の出会いを迎えることになる。
そして、少年にとってそれは間違いなく

『幸運』

な

出来事だった。

???：「お前さん、こんなところでどうしたんじゃ？」

老人の声が聞こえた。しかし、少年はその場に倒れてしまう。体が
限界に達したのだ。意識が遠のく。

???：「おい！！??少年、どうしたんじゃ??おい、」

一人の老人と一人の少年が運命の出会いを果たす。

妖精の尻尾（フェアリーテイル）のマスターマカロフと、不幸な少年上条　当麻の二人が。

妖精の尻尾（フェアリーテイル）と幻想殺し（イマジンブレイカー）が交差するとき、物語は始まる！！

第1話～ミニマムじいさんと怖いばあさん～（前書き）

二話目です。上条さんの話し方は子供のころから大人ぽかったということで。

では投稿です。

第1話～ミニマムじいさんと怖いばあさん～

ＳＩＤＥ：当麻

「～～、ぁあ、なんだここ？ふぁあ、いったいどこでせう？」

目が覚め、体をベットから起こしてみると、周りには見覚えがなかった。そういえば俺どうなったんだっけ？運がいいやつだったら心優しい誰かが倒れている所を見つけて、助けてくれたとかそういう展開なのだろうが、不幸な上条さんのことだ。

「もしかしたら、変態科学者に拾われて、体をいじくられたり、食欲旺盛な化け物に拾われ、家に持ち帰って今から食べるところとかなのか～～！？やっぱり不幸なのかーー？」

などと、傍から見たら独り言を叫んでいる危ない少年が一人いる状態なのだが、するとそこへ、

？？？：「おお、目が覚めたんじゃな？心配したぞい。」

声をかけられた方を向いてみると、ミニマムサイズの老人がぽつんと立っていた。

「え～と、あなたが俺をここへ？」

？？？：「そうじゃ。町でいきなり倒れるから、驚いたわい。もう体は大丈夫かの？」

「ああ、はい。なんとか。ただー、あの～、もう一つだけお願いが

あるんでせうが。心優しいおじい様」

???：「うん？なんじゃ」

返答されると、俺は即座にベットから飛び降り、土下座の態勢に入る。『伝説のジャンピング土下座』である。いろんな不幸にあってきた上条さんならではの技だ。子供のうちから、こんな技を習得しているのはどうかと思うが、そこは考えないようにしよう。

「少しでいいので、できればこの貧乏で空腹に苦しんでいる上条さんに食べ物を恵んでくれるとありがたいのでせうが。」

・・・・・少しの沈黙が訪れる。そして、

???：「っっぷ。がーはーはーは。元気なガキじゃのう。少し待っておれ。今、ポーリュシカの奴が持ってくるところじゃ。」

おお！！・・・なんていい人なんだ。この人は。不幸な上条さんにもようやく幸運というものが訪れたのでせうね。このじいちゃんが、救世主に見える。

「本当にありがたき幸せ。この恩は必ずお返ししますゆえ、あ、え～～と名前をまだ聞いてなかったんですけど、私めは、上条　当麻であります。」

???：「おお、自己紹介がまだじゃったのう。わしはマカロフ、マカロフ・ドレアーじゃ。魔道士ギルド妖精の尻尾（フェアリーテイル）のマスターをやっておる。」

「へえぇ～、ギルドのマスターなんですか。・・・」

・
・・
・・・

「って、はあああぁぁぁぁ！！！？？？？ギルドマスターーーー？？？しかもフェアリーテイルーーー？？？」

魔道士ギルドフェアリーテイル、フィオーレ王国に来て少ししか経ってない俺でも知ってるギルドじゃねえか。そんなギルドのマスターだとぉぉぉ！！？？しかもこんな、小っこいじいさんがぁぁぁ？？？

ガチャリ

そんな世の中の不思議に驚愕していると、ドアが開いてその方向を向くと、おばあさんが立っていた。

？？？：「・・・・・」

おばあさんは入ってきても何もしゃべらず持ってきた食事が乗ったおぼんを机に乗せただけだった。このおばあさんがポーリュシカさんとやらなのか？それにしてもマカロフさんとどういう関係なんだ？？二人は一緒に住んでいるっぽい。

ああ～～、なるほど。答えが出た俺はポーリュシカさんに聞いてみる。

「えーと、マカロフさんの奥さんでせう？」

ドガン。という効果音とともにポーリュシカさんが投げた杖？のような物が俺の顔に直撃していた。

「なんで？？」

ポーリュシカ：「／／気持ち悪いことを言うからだよ。いきなりマカロフがあんたを連れてこの家に乗り込んできて、あんたを治せと言ってきたのさ。まあ、ただの空腹と睡眠不足だったらしいけどね。ほら、その食事を食べてとっとと出ていきなさい。あたしは人間は嫌いなんだよ。」

「は、はい。」

あまりの勢いに思わず、返事をしてしまう。でも、食ったら出ていかないとな。俺は『不幸』を呼んじまうからな。これからどうすっかなあぁ。もう、両親はいないしな。一人で生きれる道を探さないとな～～　はぁ、不幸だ。

そんなことを考えていると、ポーリュシカさんとやらに話しかけられる。

ポーリュシカ：「その前に、一つだけ聞きたいことがある。」

「なんでせう??」

ポーリュシカ：「お前に回復の魔法をかけたとき、何かがその魔法を打ち消した。跡形も残らずね。おまえには、いったいどんな力があるっていうんだい？」

マカロフ：「わしもそれは気になっとった。寝ているときにもかかわらず、魔法を打ち消すなんてありえんことじゃからのう。どんな力を持っておるんじゃ??」

はは・・気づかれたのか。俺の『不幸』の原因だと思っている右手の力。言いたくなかったが、なぜかこの二人には言ってもいい気がした。

「俺の右手は…

幻想殺し（イマジンブレイカー）って言って、どんな魔法だろうが、神の奇跡だろうが、触れただけで破壊することのできる力なんだ。そして、俺の『不幸』の原因でもあるんです。」

第1話～ミニマムじいさんと怖いばあさん～（後書き）

思った以上に、話が進まない。
小説書くの、難しい。

第2話～不幸と勝負と道しるべ～（前書き）

なんか誰だよ、こいつみたいなキャラになってしまう。そこは温かい目で見てください。

第2話～不幸と勝負と道しるべ～

「俺の右手は…幻想殺し（イマジンブレイカー）って言って、どんな魔法だろうが、神の奇跡だろうが、触れただけで破壊することのできる力なんだ。そして、俺の『不幸』の原因でもあるんです。」

マカロフＳＩＤＥ：

信じられん。当麻の話を聞いて、最初にそう思った。そんなバカげた力があるなどと。しかし、こんな子供が他にポーリュシカの魔法を打ち消した理由が説明できん。素直に疑問に思ったことを問う。

「その話は本当なんじゃな？」

すると当麻は、少し笑いながらも、

当麻：「信じられないかもしれないけど、本当ですよ。こんな力がありえないってのは分かってるけど、それでも間違いなく俺にはそんな力が宿ってる。それだけは絶対なんですよ。」

嘘を言っているようにも見えんかったし、信じるしかないじゃろう。

「それは右手にしか効果がないんじゃな？」

当麻：「ええ、俺の右手首から先にしかこの力は宿ってないんですよ。なんで俺にこんな力が宿っているのかはわからないんですけどね。」

右手にしか効果がなくとも、この力は絶大じゃ。ならば、

「それだけ強力な力を持っていながら、なぜおまえさんは『不幸』なんじゃ？」

それを聞くと、当麻は少し俯いてしまい、それでも口を開け、

当麻：「たぶんなんだけど、この力は異能の力なら善悪を問わず問答無用で打ち消しちまうから、たとえそれが神様のご加護だったり、運命の赤い糸とかそういったいいものでさえ打ち消してるんじゃないかなあーと俺は思ってます。だから、この右手が空気に触れてるだけでどんどん不幸になっていくってわけですよ。はっはっはっーー！」

最初は真剣に話していた当麻だったが、最後はおどけたように語っている。その顔は誰が見ても悲しい表情でしかなかったのじゃがのう。しかし、ワシはそれを聞いて一番気になったことを聞く。

「それはお前さんが倒れた事と関係があるんじゃな？」

すると当麻は、体をビクッとさせ、顔には苦悶の表情を浮かべ、そして少しの沈黙の後、

当麻：「・・・さっきも言ったとおり、俺がいるだけでそこに不幸を呼んでるようなものだから、周りが俺を受け入れてくれるはずがねえし、唯一味方だった両親も、こっちへ引っ越してきても不幸な俺を見かねて、捨ててどっか行っちまったしな。それでこれからどうしようかなーとか思ってたら急に意識がなくなっていって、そこ

でマカロフさんに出会ったんです。」

なんということじゃ。わしが想像してたよりも、この少年は深い傷を負ってしまっておる。しかしそれでもこの少年は人生を捨てずに前向きに生きようとしておる。ならばワシがすべきことは

「おまえさん、これからどうするんじゃ？いく当てでもあるのかのう？」

当麻：「どこか仕事できるところでも探そうと思ってます。まあ、世界は広いんだしどこかに俺みたいな不幸な人間でも雇ってくれるような優しい場所があることを願うばかりですの事よー。」

その答えを聞き、ワシはにぃっと笑ってしまう。そんなワシを見て、当麻は怪訝そうな表情を浮かべたがそれを無視し、

「ならどうじゃ？わしのギルドに入ってみるのはどうかのう？」

しばらくの沈黙の後、唖然としてますよと言わんばかりの顔になってておった当麻だったが、何とかその大きく開いた口を動かし、

当麻：「・・・・えーと、マカロフさん？さっきの俺の話を聞いてました？俺がいるだけで不幸を呼んじまうし、この右手のせいで俺には魔力なんてものは無いから、どんな簡単な魔法ですらできないし、それになりより魔道士ギルドって魔法を使う人が入る場所なんだろ！？そんなところに、魔法能力ＬＥＶＥＬ０の上条さんが入ったところで、床掃除やらトイレ掃除をやるのが精いっぱいだろ！？」

なんだかぐちぐち言っておるが、そんなことは右から左へ受け流し、

「いちいちうるさい奴じゃのう。せっかく働き口を紹介しとるっちゅうのに。まあとにかく、つべこべ言わずにギルドに来んか～い。」

そう言ってワシは魔法を使い、右手で当麻を持ち上げる。もちろん、当麻の右手には触れないように。

「それじゃあのう。ポーリュシカ、世話になったのう。恩にきるわい。」

そう言ってワシはポーリュシカの小屋を出ていく。しかし、いきなり持ち上げられ、ギルドに連れて行くと言われれば、当然当麻は黙っているはずもなく、

当麻：「いやいやいや、なんでいきなりこんな展開になっているんでせう！？？上条さんはそんなヘンテコルートに入った覚えはありませんですの事よ。それより、まずは俺を降ろせーー！！」

「ごちゃごちゃうるさいのう。もっと年寄りをいたわらんかい。まったく最近の若いもんは。」

当麻：「いやいやいや、子供とはいえ人一人を軽々と持ち上げてそのうえ持ち上げたまま走るっていうのは世間の言う年寄りのカテゴリには含まれないと上条さんは思うのでせうが！！ていうか、このままなんだかんだ言って俺をギルドに連れて行くつもりだろ！！人の話を聞けーーーー！！！！」

「ああ、なんて言ってるか全然聞こえんわい。年は取りたくないもんじゃのう。うーん、ふむふむ、おおそうか。そんなにギルドにいきたいとはのう。ならスピードアップで行ってやるかのう。」

当麻：「こんな時だけ老人スキル発動！？しかもどんだけ都合のいい耳をしてやがるんだ！？言ってないからね。上条さんはそんなことは言ってませんのことよ。てか、本当にどんどん早くなってってるし、ここの位置だとすげー怖いし。ああもうなんていうかあれだ。今日は言わないと思っていたけど、言いますよ。不幸だーーーーーーーーーーーー！！！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

当麻ＳＩＤＥ：

どうも。私こと上条当麻は現在不幸真っ最中である。いきなりあのくそジジイ（マカロフのこと）に持ち上げられそのまま、ギルドに連れてこられ（強引にかつ乱暴に）今はギルドの前にいるわけだが、俺はそんなところで、ｏｒｚのような体勢になっていた。理由はもちろん、あのジジイのせいだ。いきなり体を持ち上げられ、そしてそのままとてつもないスピードで走っていきやがった。俺が、どういう状態になるかは少しはわかっていただけたであろう。顔は風圧で歪んでまだいてえし、あのジジイ何回も俺を落としそうになるし（そのたびに笑っていたので、本気で殴りたくなったのは別の話）

そんな状態が続けば人間だれでも、ｏｒｚのような体勢になるだろう。

マカロフ：「なんじゃ、そんなにへばりおって、まったく、だらしがないのう。」

誰のせいだよ、誰の！とも思ったがここまで来たら諦めるしかないのだろう。非常に不本意だが、

「じゃあとっとと行ってみようぜ。妖精の尻尾、フェアリーテイルへ。」

マカロフ；「おお、なんじゃ？いきなりやる気になったのう。」

「ここまで来ちまったんだ。だったら魔道士ギルドっていうのがどういうところなのか知ったって損にはならないだろ。」

そういい俺は歩き出す。そしてギルドの扉の前まで行く。

「入っていいのか？」

「おお、もちろんじゃ。歓迎するぞい。」

そう言われ、俺は扉を開ける。そこで俺が見たものは、

ヒュゥン

そんな音とともに、高速で飛んできた椅子だった。しかもそれは狙い澄ましたかのごとく俺の元へとやってくる！いきなりの事態に俺の体は反応できるはずもなく、

「ぶほおあぁぁ！！？？」

そんな情けない声をだし、椅子とともに空中へ放り出される。そして地面を数回転がり、ようやく勢いが止まり、痛む体を何とか動かし、元いた扉の前へ戻り、そして

「なんなんだよ！？どんだけ熱烈な歓迎だよ！？？？扉開けた瞬間いきなり高速に椅子が飛んでくるって！？？どんだけだよ？あんたのギルドはーーーー！！！」

そう俺が叫びながら言うと、

マカロフ：「おほほ、げっ元気があっていいギルドじゃろう？それにしても少し暴れすぎじゃのう。少し止めてくるからそこで待っとるんじゃよ。」

あわててじいさんはギルドに入っていく。逃げたな、あの野郎。そんなことを考えているうちに、戦争でもしているんですか？と聞いてみたくなるほど、ギルド内は荒れていた。そんな中に入っていったじいさんは、いきなり体を巨大化し始め、

マカロフ：「こらー！！やめんか、バカたれどもが！！！」

そうじいさんが叫ぶと、まるで時間が止まったかのごとく、ギルド内はピタリと動きを止めた。そして、

「おお、マスター。帰ってきたのか！」
「おい、ジジイ。今までどこ行ってたんだよ？」
「おお、怖い怖い。」

いろんな人たちがじいさんに言葉を発していた。そんな中で俺は、何かできるわけでもなくただ扉の前で呆然と立ち尽くしていた。はぁ、なんていうか不幸だ。

少し待っていると、じいさんが俺の方へやってきて、

マカロフ：「ふう。待たせたのう。では、改めてようこそ。フェアリーテイルへ。」

そういわれ、俺は生まれて初めて魔道士ギルドというものへ入っていった。

そこで俺が見たものは、今度こそ椅子が飛んでくるわけでもなく、見渡す限り人でいっぱいだった。さっきはあまりの出来事で考える暇もなかったが、よく考えれば、ここにいる人全員が魔道士なんだよな。そんなことを考えていると、

マカロフ：「どうじゃ？魔道士ギルドは？」

当麻：「ここにいる人たち全員魔道士なんだよな？」

わかりきったことを俺は聞いてしまう。他の人にとっては当たり前のことでも、俺にはやはりすごいことなのだ。魔力がない俺には。

マカロフ：「当たり前じゃ。ここはなんせ『魔道士』ギルドなんじゃからのう。いろいろ見てきても構わんぞ。ただし、置いてあるものに、むやみやたらに右手で触るのはよした方がよいぞ。高価なものを壊したら弁償じゃからな。」

「お、おう！わかった。」

置いてあるものには右手で触れないようにしよう。そう心に決め、言われたとおりに、俺はいろいろ見て回ることにした。

「本当にいろいろあるんだなー。酒場とかあるし。はは。何でもありそうだな。本当に。」

そうやっていろいろ見て回っていると、同年代の少年と少女が机でしゃべっていた。そこで俺は驚愕する。少女の方は普通だ。普通なんて言い方は失礼だが、かわいらしい少女だった。それより問題は、隣にいる目つきの悪い少年の方だった。なぜ、なぜだ、なぜだろうの三段活用。なんでこいつは

「なんでおまえは、ぱんついっちょうなんだよーー！！？？」

思わず俺は突っ込んでしまう。だって、そうだろ！なんでこいつはパンツ一丁で過ごしてるんだよ！？なんだ？なんかのいじめなのか？それとも罰ゲームとかそんな感じなのか？そんなことを考えていると、俺に突っ込まれた少年は、

？？？：「うぉ！？しまった。またかよ。で、お前誰だよ？新入りか？」

「いや、お前がパンツ一丁な件についてはもう終わりですか！？ていうか、それ自主的にやってたのかよ！？？？」

駄目だ、やっぱりこのギルドにはまともな奴はいないらしい。なんていうギルドだよ。噂では少し聞いてたけどここまでハチャメチャなギルドとは。こんなところに俺は誘われていたのか。やっぱり不幸だなー。俺。

？？？：「気にしないで。グレイはいつもこんな感じなの。あなたは新入りさん？あたしはカナ、それでそっちはグレイって言うの。よろしくね。それであなたは？」

そう言って、カナという少女が俺に礼儀よく話しかけてくる。なんていい子なんだ。ここへ来て俺は初めて、まともな人に出会ったらしい。なぜだかそれがすごくうれしく感じた（彼はまだ知らない。彼女が遠くない未来に朝も、昼も、夜も関係なく酒を飲んでいる飲んだくれになるということを）

「ああ、俺は上条当麻だ。よろしくな。新入りじゃなくて見学してるんだよ。」

カナ：「そうなんだー。それで上条君はどんな魔法を使うの？」

「いや、俺は魔道士じゃないんだ。だから魔法は使えませんのことよー。」

そう言うと、二人が唖然としている。なぜだろう？と思っていると、変態（グレイ）が、

グレイ：「はあ？魔道士じゃない！？ここは魔道士ギルドだぞ。魔道士でもないやつが何で来てんだよ？」

ああ、そういうことか。だけど、どうしよう。俺には特殊な力があるんですよー。と言うのは簡単なのだが、信じてくれるわけないしなー、特にこの変態（グレイ）は絶対信じなさそうだしなー。うーん。どうしよ。

マカロフ：「なんじゃ、当麻。もう友達を作ったのか？これでギルドに入っても友達には困らないのう。」

茶化すように入ってきたじいさん。何度も言うけど俺は入るなんて言ってないからな。すると変態（グレイ）が、

グレイ：「おい、じいさん。どういうことだよ！？なんで魔法も使えないやつをギルドに入れようとしてんだよ！？」

変態（グレイ）が怒気を込めながら、しゃべっている。すると、じいさんが俺に耳打ちしてくる。

マカロフ：「なんじゃ、お前さんまだ自分の力しゃべっておらんのか？」

「ああ、どうせ話しても信じてくれないと思ったし、どうすっかなーとか思ってたら、じいさんが来たというわけですよ。」

ふむ。と少し考え込む様子を見せる。そして少しの間をあけ、

マカロフ：「なら、当麻とグレイ、ふたりが戦えばよかろう。」

・・・

しばらく言葉を失った。何を言っているのやら。このおじいちゃんは、どうやったらそんな結論になるんでせう？俺の心を読んだかのように、じいさんは説明しだす。

マカロフ：「グレイは、なんで魔法も使えないこんなガキをワシがギルドに入れたがっているのか気になっていて、当麻は魔道士というものがどんな者か気になっておる。なら二人が戦えば済む話じゃろう。名案じゃろ。なはは。」

はっはっは。もう笑うしかねえよ。なぜこのおじいちゃんはこんなとんでもない案を自信満々に言えたのだろう？

「そんなとんでもない理由で戦えるわけねえだろ。ほら、変態（グレイ）も言ってやれよ。」

変態（グレイ）に話を振ると、グレイは不敵に笑いながら、

グレイ：「ああ、いいぜ。その勝負のってやるよ！！。ぼこぼこにしてやる。ていうか、今お前、俺のこと変態と書いてグレイと読まなかったか！？俺は変態じゃねえぞ。」

・・・駄目だった。やはりこいつは駄目だった。なぜ今の流れで話に乗るんだよ？

「変態（グレイ）が乗ったところで、俺は絶対にやらねえぞ。そんなくだらない話。後、昼間っからパンツ一丁でうろついてるやつが変態じゃないわけがない。」

すると、じいさんが呆れたように言う。

マカロフ：「いつも、なにかといってくるのう。お前さんは。ならこういうのはどうじゃ？お前さんが勝ったら、もうワシはお前さんを無理にギルドに誘ったりはせんわい。これでどうじゃ？」

その言葉を聞き、嬉しい筈なのに、なぜかそんな感情は湧き出てこず、なぜだかモヤモヤとしたものが湧き出ていた。そして、それはなぜか戦えばわかるような気がした。ならば、俺がやることは一つしかねぇか。

「・・わかったよ。そういうことなら、相手になってやる。」

そう俺が言うと、変態(グレイ)が、

グレイ：「へ、ようやくやる気になったか。表に出ろ。」

そう言うと、変態(グレイ)は歩いていく。俺もそれについていくように歩き出す。後ろでじいさんが笑っていることに気付かずに。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

？？？ＳＩＤＥ

グレイと見たこともないガキが戦うことになったらしく、そういうことが大好きなほかの連中はすでに表に出ていた。まぁ、俺もなんだけどな。

グレイ：「速攻で終わらせてやるよ。」

当麻：「は、変態ヤローなんかに負けられるかよ。」

戦う前に二人は口論を始めていた。いやぁ、若いっていいねぇ。し

かし、俺は少し気になったことがあり、マスターの元へ向かう。

「おーい、マスター。どういうことだよ。グレイと見たこともないガキをいきなり戦わせるなんてよ。何企んでんだ？マスター」

マカロフ：「おお、ギルダーツか。何も企んでないわい。何もな。」

そう言っているマスターの顔は、何かたくらんでますよと言わんばかりの笑みが浮かべていやがった。

「まぁ、いいけどよぉ。それより俺が気になってるのは、あのガキのことだよ。あのガキからは何も魔力が感じられねえ。なんなんだ、あのガキは？」

マカロフ：「まあまあ、この戦いを見れば、おぬしの悩みも解決しとるじゃろうて。」

そう言いマスターは前に出ていく。そして、

マカロフ：「それでは、二人とも準備はいいかのう？」

グレイ　当麻：「「ああ！！」」

マカロフ：「それでは、始めぃ。」

その瞬間先に仕掛けたのはグレイだった。

グレイ：「アイスメイク　槍騎兵（ランス）」

そういったグレイの手からは、何本もの氷の槍が出てき、それはすべてガキの方へ向かっていく。そして、

ズガガガガガガ　ドッゥーーン

そんな音とともに、砂埃が立ち上る。

あちゃー、もう決まっちまったのか。ギャラリーもあっさり勝負が決まったことに不満があるようだった。そんなことよりも、

「おい、どういうことだよ？マスター。簡単に決着ついちまって、これで何がわかるっていうんだよ？」

マカロフ：「安心せぃ、まだ勝負はついとらんぞ。」

「はあ？ただのガキがあの攻撃を喰らって立ちあっ！！！」

俺は驚いた。砂埃が晴れていき、そこには、右手を前に突き出し、無傷で立っているガキがいた。そして彼は笑っていた。そして彼は何かを言った。遠くて聞こえるはずもなかったが、なぜか俺は何を言っているか分かった。

当麻：「なんていうか、不幸つーか・・・ついてねーよな。オマエ、本当についてねーよ。」

なんなんだ、あのガキは？おもしれぇ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

当麻ＳＩＤＥ

あっぶねえええ。マジで死ぬかと思ったあぁぁ。いきなりまさか氷の槍みたいなのが出てくるとは。もう少し量が多かったら間違いなく串刺しになっていただろう。それにしても氷の魔道士なのか。俺との相性はまあまあいいってところか。グレイを見ると、だいぶ慌てていた。そりゃそうだろう。自分の魔法が、魔法を使えないやつに効かなかったのだから。このチャンスを生かすしかねーよな。俺はできるだけ平静をよそおい、そして相手に告げる。

「なんていうか、不幸つーか・・・ついてねーよな。オマエ、本当についてねーよ」

そういうと、グレイは後ずさりしていた。その瞬間、俺は駆け出す。右手を強く握りしめながら。この拳が届く範囲に入るために。ただ真っ直ぐに。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

グレイＳＩＤＥ

ありえねぇ。俺の攻撃は確実にあいつに命中したはずだ。なのに、なんであいつは、魔道士でもないあいつが、無傷でそこに立ってやがるんだ!?そして何よりあいつはなぜこの状況で笑ってやがるんだ??何者なんだよ、あいつは?考えがまとまらないでいると、あいつは言う。ただ静かに、俺の方を睨みつけながら、

当麻：「なんていうか、不幸つーか・・・ついてねーよな。オマエ、本当についてねーよ。」

この状況でなんでそんな言葉が出てきやがるんだ?あいつには何かあるってのか?そんなことを考えていると、あいつは走り出してきた。真っ直ぐにおれの方へ。いけねえ。今は余計なことは考えずに、こいつをブッ飛ばす。

「アイスメイク　大槌兵（ハンマー）」

これで決まるはずだ。そう思っていると、あいつは右手を上に掲げた。そんな細腕で何とかなる魔法じゃねえ。これで終わる。しかしそんな考えは覆される。あいつの頭上に落としたハンマーはあいつの右手に触れた瞬間、

バギン

そんなガラスが割れたような音がした。そしてその瞬間、俺が作り

出したハンマーは消えた。

「なっ！？」

そんな言葉が思わず出てしまう。今何が起きた！？ただ右手に触れただけだった。それだけで俺の魔法は消えていった。こいつはいったいなんなんだ！？？だがあいつは考える暇すら与えない。気づくと既にあいつは迫っていた。まずい。とにかく距離を。

「アイスメイク　盾（シールド）」

あいつと俺の間に巨大な壁を作る。これであいつは止まる。そう、止まるはずだった。だが、

「うおおおおおおおおおおっっっ！」

そんな叫び声を上げながら、あいつは右手を盾へ打ち付ける。子供のパンチで壊れるような盾ではない。そう、そのはずだった。なのに、

バギン

再びそんな音が耳に響いた瞬間、俺が作り出した盾はハンマーと同様に消えていく。跡形も残らずに。この現実に驚かないはずがない。しかし、その一瞬の隙が命取りになった。目の前に迫ったあいつの右の拳が俺の顔面に突き刺さる。

「ごはぁ？！」

あいつの拳は思った以上に威力があり、俺は地面に倒れる。意識は何とかもったが、立ち上がれそうにない。ちっくしょう。どうなってやがる？・・倒れた俺は、ただあいつに聞く。

「お前、なんなんだよ？」

ただそれだけが知りたかった。するとあいつは、俺の方へ顔を向け、

当麻：「上条さんは普通の人間だよ。ただ一個だけ他の人とは違うってだけさ。」

そういうあいつの顔は、どこか悲しさを見せていた。なるほどな。

「お前もいろいろあったんだな。」

俺がそう言うと、あいつは驚いた表情で俺を見てきた。図星かよ。

「前にじいさんが言ってた。フェアリーテイルの魔道士はみんな何かを抱えてるって。お前をじっちゃんが誘ってるってことは、お前にも何かあったのかって思ったけど、図星らしいな。」

当麻：「おまえ『も』ってことは、お前にも何かあったのか？」

そう聞いてくる。普段なら絶対に言わねえが、なぜか今は素直に言おうと思った。思いっきり殴られて、おかしくなっちまったのか。

「俺は両親を化け物に殺され、俺を拾ってくれた人も俺のせいでいなくなっちまった。」

あいつは、少し驚いた表情を見せるが、すぐに戻り、

当麻：「そうか」

簡単に言ってくる。は、同情でもしてんのかよ。だったら、言ってやる。

「でもな、俺を拾ってくれた人はこう言ってくれた。お前の闇は私が封じようって、歩き出せ、未来へって言ってくれた。俺はそれを信じてる。お前に何があったのかは知んねえけどよ、いつまでもうじうじしてんじゃねえよ。てめえがそんなに弱かったら、てめえに負けた俺が情けなくなっちまうだろ。」

当麻：「・・・。は、はは、あははは。そうだよな。まさかこんな変態ヤローに言われて気づくとはな。嬉しいんだが、悲しいんだが、よくわっかんねえや。」

「だから、俺は変態じゃねえよ。少し脱ぎ癖があるだけだ！」

そう言いあいながらも、俺たちは笑っていた。確かに笑い合っていた。すると、

がやがや　ざわざわ

騒がしい音が近づいてくる。勝負が終わったと思って、フェアリーテイルの連中が来やがった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

当麻ＳＩＤＥ：

はは。そうだよな。いつまでもうじうじするな、か。俺は右手を見つめ、そして思いきり右手を握りしめ、思う。今までの俺は、自分一人が不幸になっていると思ってた。そして、それはこの右手のせいだってずっと考えていた。

でもそんな考えは俺の甘い幻想に過ぎなかった。だれだって、何かを抱えて生きている。それに重いとか軽いとかなんてそんなものは関係ない。ただそれを受け止めて、進めるか、立ち止まっちまうかが重要だったんだ。俺はずっと立ち尽くしていたんだ。すべてをこの右手に押し付けて、はは。本当に笑えてくるよな。でも、これからはこの右手とちゃんと向き合って、俺も前へ進まなくちゃいけないよな。そんなことを決心していると、急に後ろから、

「よう、お前スゲーな。グレイの魔法が消えたけど、あれどうやったんだ？」

「お前魔法使えないって聞いたけど、さっきのどうやったんだ？」

どうやら俺たちの戦いを遠くで見ていたフェアリーテイルの他の人たちがいつの間にか来ていたらしい。そして俺は質問攻めにあう。どうすりゃあいいんだ？そんなことを考えていると、

マカロフ：「よさんか。バカたれども。当麻が困っておるじゃろう。それと、当麻はワシと話があるから、お前さんたちは早くギルドに戻らんかい。」

そうじいさんが言うと、ブーブー文句を言いながら、全員おとなしくギルドに帰っていった。

全員が帰ったのを見届けるて、じいさんの方を見ると、もうひとりでかいおっさんが立っていた。

ギルダーツ：「おお、ごくろうさん、面白れぇ戦いを見せてもらったぜ。」

そういわれ、俺は少し戸惑いながら聞く。

「え～と、あなたは誰でせう？俺は上条当麻っす。」

ギルダーツ：「おお、自己紹介が遅れたな。俺の名前はギルダーツ。フェアリーテイルの魔道士だ。」

そう言って、俺たちが自己紹介をすると、

マカロフ：「自己紹介は済んだようじゃのう。それより、戦いご苦労じゃったのう。それにしてもお前さん、ずいぶん戦い慣れてるようじゃったが？」

「まあ、厄介ごとにはよく巻き込まれてたからな。そうしてるうちに戦い方も身についていったってわけだな。」

ま、そのおかげでグレイには勝てたんだけどな。自慢できることじゃないんだけどな。

マカロフ：「お前さんが勝ったんじゃから約束は守ろう。じゃが、これだけは聞かせてくれい。これからどうするのかをのう？」

「そうだな。これからはこの右手を何とか有効に使える方法はないか考えていこうと思ってる。『不幸』とかそんなのは関係なくて、この力を誰かの役に立てる方法はないか。」

そう俺が言うと、二人はなぜか笑いだしていた。俺が何か不安を感じていると、

マカロフ：「なら話は簡単じゃて。ギルドに入ればよかろう。」

「いや、だから俺みたいな魔法を使えない人間がギルドに入ったってできることがないだろ！？」

ギルダーツ：「いや、できることはたくさんあるぜ。お前は魔法を使えなくてもグレイに勝ったじゃねぇか。」

マカロフ：「お前さんの右手は魔道士相手には切り札的存在じゃからのう。世界にはのう、いい魔道士だけじゃないんじゃ。悪の道に走り、悪のためだけに魔法を使うものがおる。そんな連中は誰かを不幸に陥れようとする。お前さんがいれば、お前さんの力を使えば、誰かを幸せにできるはずじゃ。」

・・俺の力で誰かを幸せに、か。もしも、本当にそんなことができるなら、俺は

「でもそういうやつらってやっぱり強いんだろ？そんな相手に俺一人で勝てるのかよ？」

マカロフ：「何も一人で勝つ必要はないじゃろう。一人で勝てなければ二人で、二人で勝てないなら、三人で、そうやって助け合うのがギルドじゃ。それに、安心せい。お前さんを強くするために、ギルダーツがお前さんを鍛えるからのう。」

そういわれ、俺が驚くよりも先にギルダーツという人の方が驚いていた

ギルダーツ：「いや、なんでだよ！？マスター。俺はクエストとかで忙しいだろ？マスターがやればいいだろ！」

マカロフ：「わしだって忙しいわい。それにワシは拳ではあまり戦わないからのう。拳で戦うお前さんが教えた方がいいじゃろう。マスターの命令じゃぞ。」

ギルダーツ：「っっ！！はあ、わかったよ。クエストでほとんどいねえけど、その合間ぐらいには鍛えてやるよ。ただし、俺は手加減は苦手だからな、覚悟しておけよ。」

なんかいつの間にか俺が入ることが決定している。ギルドに入るにしても、このハチャメチャなギルドに入るのは少し抵抗もあるのだが、

マカロフ：「話はまとまったのう。じゃあ、

そう言ってじいさんは、俺に右手を差し出してくる。

この手を握るかはお前さん次第じゃ。この手を握り、ワシのギルドに入るか、それ以外の方法を探すかはお前さんが決めることじゃからのう。」

そう言われ、俺は右手を見ながら少し考える。だけど、俺の考えはもう出ていた。俺を救ってくれたギルドを、俺に生きる道を教えてくれたギルドの誘いを断るなんてできなかったんだから。そして俺も右手を差し出す。どんな幻想も殺せる右手で、握り返す。

それは、間違いなく現実だということを俺に教えてくれた。

こうして俺は、魔道士ギルドに入ることになった。妖精の尻尾（フェアリーテイル）へ。

第3話～鬼（ギルダーツ）との修行～（前書き）

今回は当麻がフェアリーテイルに入ってからの日常です。そしてギルダーツとのバトル。戦闘シーンが難しい。

では投稿です。

第3話～鬼（ギルダーツ）との修行～

当麻ＳＩＤＥ

俺がフェアリーテイルに入って一か月がたった。その間にいろいろなことがあった。まず俺の右手を説明したら、なんかギルド全員から魔法を撃ち込まれ、それを打ち消すと、驚かれ、さらにどんどん打ちこまれ、逃げなきゃいけなくなるわ、グレイからは会うたびにグレイ：「俺ともう一回勝負しろよ。」

なんていわれ続けるわ、そして俺が初めて仕事をしようとしたら、今の俺にできることなんてたかが知れているわけで、呪いの解除ぐらいしかできることは無く、それをやりに行ったら、やはりというべきなのか厄介ごとに巻き込まれ、魔道士が一人暴れていたのでそれと戦うことになってしまったり、その戦いによって壊れたものはなぜか俺が弁償する羽目になってしまい報酬が無くなり、一緒に行ったグレイからは

グレイ：「おまえ、本当に不幸なんだな。」

と憐れむように言われ、やっとの思いで帰ってきたら、ギルダーツとの修行が待っており、そしてそこでも体がずたぼろになるまで修行？をし（後に聞いた話だがギルダーツはフェアリーテイル最強候補だった）当面の生活費はじいさんに借りることができたので、俺はアパートを一部屋を借りることができたが、家の中でも数々の不幸な出来事が起こってしまうという、人の一生分の不幸を一か月に詰め込んだようなそんな一か月でし。そして今はギルドにいて、次の依頼を探していた。

「なんかいい依頼でもないのか。上条さんでも簡単にできるような仕事は？」

そんなことをリクエストボード（依頼を貼る場所）の前で考えていると、

グレイ；「あぁ、当麻また依頼に行くのかよ？は、やめとけ、やめとけ。どうせまた不幸なことでも起こるんだろ？」

カナ：「ちょっとグレイ。でも当麻って本当に不幸だよね。なんか、可愛そうになってくるぐらいに。」

と二人からそんなことを言われる。

「うっさい。二人とも！！わかってますよ。上条さんが不幸だってことぐらい！！」

そんなことを言い合っていると、酒場の机の上で座っていたじいさんが、

マカロフ：「なんじゃ？当麻。お前さん、今日はギルダーツとの修行の日じゃなかったかのう？」

・・・「しまっったーーーーーーーーーーーー！！！」

そうだ。そうだった。そういえば今日だったー。時計を見てみると、

すでに集合時間から二十分ほど経過していた。

グレイ：「お前死んだな、まあ生きて帰ってこいよ。」

グレイは真剣な顔をしてまるで戦争にでも向かうやつに向けて言うように言った。カナは何も言わずに何か考えているようだった。いや、そんなことはどうでもいい。とりあえずやばい。あのおっさんは怒らせたらやばい。この一か月で俺が死にかけながらもあのおっさんと修行して学習したことだった。そう考えながら俺は走り出す。ははは、なんていうかあれだ。

「不幸だ————————————————————————！！！」

そんなことを叫びながら走る。しかしほかの三人は

「「「(いや、お前の自業自得だろ！！」」」

そんなことを考えているとは知らずにただ走る。

——————

目的地に着くと、そこには魔力が体から流れ出て、怒っていると言

わんばかりのギルダーツがそこにはいた。そしてそれを見てしまった俺は

「すいませんでしたーーーーーーー！！」

そう言い、走りながらその勢いで、土下座をする。

ギルダーツ：「なんで遅れた？」

そういうギルダーツの声には、明らかに怒りが含まれていた。そんなギルダーツに嘘を言うわけにもいかず、

「私上条当麻の不注意であります。それ故どんな罰も受けますゆえ、どうか命だけは。」

俺が本気で命乞いをしていると、

ギルダーツ：「はぁ、まあいい。それよりとっとと、修業を始めるぞ。」

そう言われ、俺は少し驚いた。遅れた罰に、空中を飛ぶことになるパンチを受けるのかな～とかそんなことを考えていたのだが、そんなことはなくあっさりとギルダーツは言った。それが少し恐ろしくも感じたが、

「は、はい！！」

そういった俺を見て、ギルダーツは

「じゃあいつも通りだ。俺と戦う。ただそれだけだ。」

そう。ギルダーツとの修行方法は至極簡単。ただギルダーツと戦えばいいだけなのだ。ギルダーツいわく、「お前みたいなのは、体で覚えた方が早えからな。俺と戦いながら体で覚えていくしかねぇだろ。」らしい。しかし、俺にとってそれはまさに地獄。毎回毎回、死にかけることになるこの修行方法はどうなのだろうか。そう思い、

「はあ、あの～ギルダーツさん。他に修行方法はないんでせう？この方法だと上条さんが強くなる前に体がもたないと思うんですが」

ギルダーツ：「前にも言っただろうが。お前みたいなのには、言葉で聞かせるよりも体で覚えた方がいいんだよ。逆に当麻、俺が説明したらお前しっかりと理解できるのかよ？」

・・・無理だろう。そう思ってしまう。俺の頭は正直そこまで出来が良くない。

はあ、そんなこんなで結局俺はこの修行をやるしかないのだろう。強くならなきゃいけないんだからな。

「じゃあ、行くぞ！！」

ギルダーツ：「ああ。全力でな。」

言葉を交わすと、俺はギルダーツに向かって走り出す、俺の攻撃方法は拳しかない。なら近づくしかない。あの化け物に。そして拳の届く範囲に入り俺は右の拳を奴にぶつけようとする。しかし、

ギルダーツ：「遅えぞ。もっとスピードを上げねぇか。」
そんな言葉と共に、俺の体は宙に浮く。ギルダーツが足で俺の足を払ったのだ。そして、空中でよけられない俺にギルダーツの拳が通る。
「っっぐはあぁ！！」
空中で殴られた俺の体はそのままの勢いで、吹っ飛ばされていく。
そして
ドカァァン
木にぶつかりその勢いは止まる。だがそれは体の中の酸素が無くなるんじゃないかというくらいの衝撃だった。衝撃で考えられなくなる頭を何とか使い、今の状況を理解しようと考える。
「（考えろ。ギルダーツに一撃を与える方法を。闇雲に突っ込んでも今みたいに簡単にあしらわれちまうし、でも近づかない限り俺は攻撃できねえし、どうする？）」
ギルダーツ：「ほらどうした？もうダウンか。来ないならこっちから行くぜ。」
そう言いギルダーツが俺の元へ走ってくる。そしてあいつの拳が俺へ向かってくる。そして、
ギルダーツ：「おらあぁぁぁっっ！！」
その拳を何とか体を回転させ避ける。だが

キーン

ギルダーツの拳と地面が激突するとそんな音が鳴り響く。するとその瞬間、地面が砕け散り、その破片と共に体が吹き飛ばされていく。

「ごがぁぁっ」

体が地面を何度も回転し、ようやく勢いがなくなり、倒れ込む。ぐ、ちっくしょう。やっぱりとんでもなく強えぇ。身体能力も馬鹿げてるけど、ギルダーツの魔法

『クラッシュ』

触れたものを破壊する魔法。俺の幻想殺しの何でもアリ版だ。しかも俺のように右手だけじゃないのである。今のだって、腕力だけじゃなく魔法を使い地面を吹き飛ばしやがった。その勢いで俺の体を吹き飛ばしたってわけだ。その魔法だって、俺の右手で触れれば消せることだってできる。だけどギルダーツはそんなレベルじゃない。倒せるか倒せないかなんてもんじゃない。触れることさえできない。だけど、俺は立ち上がらなきゃいけねぇんだよ！！

ギルダーツ：「ほら、早く立ち上がれ。俺に勝てなきゃ誰かを幸せになんてできねぇんだぞ。」

そうだ。ギルダーツより強い魔道士なんて山のようにいるらしい（信じられねぇけど）。だけどそれが本当なら俺はギルダーツを倒せるぐらいにならなくちゃいけない。この右手で誰かを守れるように、

「うおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！」

そう叫びながら俺は立ち上がる。体はぎしぎしと痛む。立ち上がるだけで、体中から血が噴出してくる。けど、そんなものは関係ない。あいつに一撃を叩き込む。それだけだ。拳を思いっきり握る。血が出るぐらいの勢いで。そして、倒すべきギルダーツを睨みつける。

ギルダーツ：「へ、いい顔だな。そして、その覚悟。まだやる気なんだな。来いよ。幻想殺し。」

今にも体は倒れそうだ。だけど、駆け出す。ギルダーツの元へ。この拳をぶつけるために。

「「おらあああああっ！！」」

ゴンッ！！

二人の拳が互いの顔に叩き付けられる。そこで意識は無くなってしまった。だが、意識が飛んでしまう前に、ギルダーツの顔が見えた。そこには、笑みが浮かんでいた。

ぁ、意識が戻り視界に見えたのは、いつものフェアリーテイルの病室だった。俺はギルダーツとの修行が終わると、必ずここへ運ばれ

る。今ではもう、慣れてしまった。最初の頃はグレイやカナ、ほかの奴らもお見舞いに来てくれていたのだが、修業するたびに来るもんだからみんな来なくなってしまった。さびしくなんてないやい。

「・・・・」

それにしても、またここに来たということは、またやられてギルダーツに運ばれたのだろう。どんなにやってもその差は縮まらない。縮まる気がしなかった。

「（こんなんで、本当にみんなを守れるようになんのかなぁ？うーん。難しい話だよなぁ。）」

そんなことを悶々と考えていると、

？？？：「よう、起きたのか。体は大丈夫か？」

不意にそう言われ、声のした方を向くと、ずっとそこにいたのか、ギルダーツが立っていた。

「あ～～、体は大丈夫だな。修業で体は頑丈になってってるみたいだからな。後、ありがとうな、いつも運んでくれて。」

ギルダーツ：「はっは。気にすんな。それより今何を考えてた？真剣な顔をしてたが」

あー、見てたんっすか。嘘を言う必要もないので、素直に言う。

「いや～、何回やってもギルダーツさんの足元にも及ばないな～と、こんなことでみんなを守れるようになるのかな～なんて、上条さん

に思ってみてたりしたわけでせうよ。」

そう俺が言い終えると、ギルダーツは笑った。豪快に。

ギルダーツ：「がははは。あったりまえだ。俺が何年生きてると思ってんだよ。てめーみたいなひよっこに負けるかよ。だけど、お前は強くなってるよ。確実になぁ。」

そう言われ、俺は、？となる。いつもいつも、ただボコボコにされてるだけの気が。俺が思っていることが分かったのか、

ギルダーツ：「その証拠に今日お前は俺に一撃を当てた。これは確実な進歩じゃねぇか。」

そういえば、最後に一撃あてたような気もするが、

「いやいや、ギルダーツならあんなパンチ避けれただろ？それに力も入ってないピヨピヨパンチだったしな。入ったとは言わねえだろ、あれは。」

ギルダーツ：「どんなパンチだろうが入ったことは事実。素直に喜べよ。」

それもそうか。なら素直に喜んでおこう。そんなことを思っていると、

ギルダーツ：「俺に一撃あてられるようになったんだし、明日からの修業はもっときつくなっていくからなぁ。まぁ、頑張れよ。」

そう言ってギルダーツは部屋を出ていこうとする。しかし今聞き捨

てならない言葉を聞いてしまった。

「いや、ギルダーツさん！！？今でこんな瀕死状態なんでせうよ？これより強くなったら、上条さんは間違いなく三途の川を渡り切ってしまいますよ！？」

俺が反論するが、ギルダーツは笑いながら、部屋を出て行ってしまう。

一人残された俺は、この理不尽な仕打ちにただ一人で叫ぶことしかできなかった。

「不幸だーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

第3話～鬼（ギルダーツ）との修行～（後書き）

次回はやっとエルザさんの登場です。

やっとフラグが建てられる。

第４話～赤髪の少女との出会い～（前書き）

どうもです。書き方を少し変えてみました。

やっとエルザが出せました。それでは投稿です。

第４話～赤髪の少女との出会い～

当麻ＳＩＤＥ

フェアリーテイルに入ってから、一年が過ぎようとしていた。その間にもやはり不幸な目にあい続けて来た私こと上条当麻なのだった。そして今日も朝から、起きてフェアリーテイルに行こうと歩いていると、後ろから来た魔道四輪にひかれ、川に落ちる羽目になるわ、工事中の横を通り過ぎようとしたら、上から鉄骨が降ってくるとわと、散々な目にあっていた。はぁ、

「不幸だ。」

そう言っていると、ギルドにたどり着いた。ギルドに着くと、

「うぉっ！？当麻、なんでお前は体中濡れてんだよ？」

「おおっ！？本当だ、大丈夫？？」

グレイとカナの二人が俺に話しかけてくる。さすがに心配してくれてるようだ。そりゃそうだろう。朝っぱらからこんなずぶ濡れな奴がいれば誰だって気になるはずだ。

「いや、何ていうかいつも通りの不幸ですよー。ははは、はぁ。」

もう乾いた笑いしかできねぇ。まあ終わったことを考えても仕方ねえか。そうやって無理やり思考を変え、二人の方を見てみると、カードを机に広げて何かをしていた。

「グレイとカナは何してんだ？」

そう俺が聞いてみると、カナが

「相変わらずだねえ。その不幸。これは私のカードで占いをやってるんだ。ああそうだ。当麻も占ってやるよ。」

占いねぇ。不幸な俺がやっても意味がない気がするけど、まあ気休めぐらいにはなるのか？そう考え、

「じゃあ頼むわ。」

そういうと、カナはカードを広げ、占いを始める。そして、

「おお、よかったじゃない。今日の当麻の運勢、最高だって。あっ！」

・・・・これで最高！？朝っぱらから散々不幸な目にあっているというのにこれが上条さんの最高だっていうのか？はは。笑えてくる。これが最高ってもう救いようがねえじゃねえか。

「いやでも、これから何かすっげーいいことがあるかもしれねえじゃねえか？なっ？」

さすがのグレイもそんな俺に同情したのか、フォローしてくる。

「いいんですよ。グレイさん。わかってましたよ。上条さんが不幸だってことくらいはさ。はは、やっぱりあれだ。

ふこうだーー」

そんなこともあり、今日も不幸絶賛中！！な上条さんだったが、急にギルド内がざわつき始めた。なんだろう？と思い、顔をあげてみると、

赤髪で、片目に眼帯をしていて、服はボロボロだったが、とても可愛らしい少女がそこにはいた。

「ここがロブおじいちゃんののいた所・・・」

？よくわからないことを言っていた。しかしこのギルドに何か用なのだろうか？もしかして、このギルドに入りたいとか？それなら、一刻も早く止めなければ！！あんな純粋そうな子がこんなギルドに入ることだけは！！そう思い、俺はすぐに立ち上がり、彼女のもとへ向かう。

「え～と、ここに何か用でせう？」

そう俺が聞くと、彼女は俺の方へ顔を向け、

「・・・・・・」

・・・・

どうしよう。何か言ってくれるかと思ったが、一切しゃべらず無言

でこっちを見ている。うーん、どうしよう？そんなことを考えていると、

「・・・」

彼女は何も言わず、進んで行ってしまう。

「おい待てって！」

そういって、彼女を追いかけようとする俺だったが、

「っおわっ！？？」

床に何かおいてあったのか、それに躓いてしまう。そしてその先にはさっきの彼女。つまりどういうことになるかというと、

「っが」

「きゃあっ！？」

その勢いで倒れてしまう。

っいててて。くっそー。誰だよ。変なとこに物置きやがって。はぁ、不幸だ。そんなことを考えながら、起きようと手を置こうとすると、

ふにっ

ん？なんだろう？何か小さくて柔らかいものに触れたような感触が帰ってきた。その感触の正体を見てみると、

・・・・・・

彼女がそこに倒れていて、彼女のつつましい胸に俺の手があった。どうやら俺は彼女を押し倒してしまったようだった。その考えに達し、彼女の顔を見ると、

「んん、！！？？？」

この状況がどういう状況なのか気づくと、顔をトマトのように赤らめ、動揺していた。

「え～～～と、これは何と言いますか。足に置いてあったものに躓いて、あなた様も巻き込んで倒れてしまい、それで起きようとしたら、間違えてあなた様の胸に触れてしまっただけでありまして、決して邪な考えはありませんのことよ？」

動揺する頭で必死に弁解しているが、彼女の耳には入っていないようで、

「～～～～～／／／／／／／。ど、どけーーーーー！！！」

そう言いながら、彼女は拳を握りしめ、そして

ドゴッッ！！

そんな鈍い打撃音とともに俺は空中へ投げ出されたのであった。俺を殴り飛ばした彼女は、顔を赤くしたまま、ギルドを飛び出していってしまった。そんな俺たち二人を見ていたギルドの奴らは最初はポカーンとしていたが、

「「「「「はははははははーーーーーーーーー」」」」」

「おい当麻。始めてあった女の子をいきなり押し倒すなんてやるじゃねえか。」

「やるじゃねえか。当麻。」

好き勝手言い始めやがる。殴られた顔をさすりながら、

「ちげーよ。足に何かあってたまたま躓いちまったんだけだぞ。ええそうです。上条さんはたまたま不幸にもそうなってしまっただけでせうよ！！！」

そう弁解するも、誰もそんなことは聞いておらず、勝手に騒ぎ始めていた。くっそー、それにしても彼女はいったい何の用だったんだ？俺のせいで聞きそびれちまったなー。でも大事な用事があればまた来てくれるのかな。そう考えながら、グレイとカナのもとに行くと、

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

すごく冷たい視線が俺に突き刺さった。

「いや、あのお二人さん。さっきも言った通り、狙ったとかそんなんじゃなくてですね、たまたま不幸にもああなってしまっただけなんでせうよ！！」

そうやってもう何度目かわからないが、弁解を始めるた俺だったがグレイは話を聞かずに

「俺が言うのは初めてかもな。はは。うっせーぞ、『変態』」

「いえーい。言われると思ってましたよ！こんちくしょう！！くっそー、何が今日の運は『最高』ですだよ？これから変態として扱われるこんな日がどうしてなんだーーーー？？くっそーやっぱり不幸だーーーーーーーー！！」

そんなことを叫びながら、崩れ落ちると、カナが

「それにしても、あの子なんだったんだろうね？変態のせいでわからなかったけど。」

「変態言うなー！はあ、だけど本当になんだったんだろうな？あの格好から見て普通じゃなさそうだったけど。」

そう言って、少し考え込むと、

「気にすることねーだろ。何か用があればまた来るだろ？それより当麻、お前今日ギルダーツとの修行だろ。のんびりしてていいのかよ？」

グレイに言われ、俺はハッとする。そうだったー、あの子のことがあったから忘れていたが、今日は修行の日だったー、そう考えながら、時計を見ると、もうすぐ修行の時間だった。これならば、

「くっそーー！！いやまだ走れば間に合う。かみじょうさんはあきらめませんのことよーーーー！」

俺は全力で走り出す。なんか前にもこんなことがあったなーとか思いながら全力で。

当然間に合わず、いつも以上にボコボコにされた上条当麻がいたのは、言うまでもない。

第5話～孤独な少女と不幸な少年～（前書き）

何とか今回でエルザとの出会いが終わった。また長くなってしまった。短くまとめることができねえ。そしてエルザのキャラ崩壊がすごい。

というわけで投稿です。

第5話～孤独な少女と不幸な少年～

当麻ＳＩＤＥ

目が覚めると、俺はまたフェアリーテイルの病室のいつものベッドに寝ていた。寝ぼけている頭を何とか動かし、何があったんだろうと思いだしてみる。あ～～、そういえば

はぁ～～～、昨日は散々な目に遭った。

朝っぱらから不幸な出来事が続けて起き、赤い髪の少女と、運命的？な出会いを果たし、周りの奴らからは変態の称号をもらい、ギルダーツとの修行では時間に遅れたことによりいつも以上にボコボコにされるなど、いろいろとボロボロだっのだ。

「ま、気分でも変えて今日は難しい依頼でも受けちゃおっかなー！今日はギルダーツもいねーし。なんだか今日は楽しい日になりそうだー！」

無理やり思考をポジティブ思考に切り替え、病室を出ていく。そこで上条当麻が見たものは、

「あっ！」

昨日の少女がそこにいた。しかし、昨日とは違うところがあった。昨日のボロボロな服とは違い、彼女は鎧を纏っていた。そんな名も知らない彼女は俺の姿を確認するなり、

「っっっ／／／／／／」

顔を赤くしてしまい、一人でどこか行ってしまう。

「・・・・・・・・」

嫌われてんなー。まあ昨日のことがあったのだからしょうがないのかもしれないけど、それより彼女はいったいなんなんだ？そう思い、

「なあ、グレイ。彼女結局フェアリーテイルに何の用だったんだ？」

「ああ当麻か。あいつフェアリーテイルに入ったらしいぜ。昨日お前が気絶してる間にあいつがまた来て、じいさんとなんか話しして、話が終わったらそしたらもう入ることが決まってやがったんだ」

へぇー、彼女も何が好きでこんなギルドに入ってしまったのだろうか。それにしても、

「何怒ってんだ？おまえ」

「気に入らねぇんだよ。なんであいつギルド内で鎧なんて着てるんだよ？」

いや、いつも服を着てないお前が言うなよ。と、思ったが、大人な上条さんは言わないでおこう。それよりも、

「（にしても気になるんだよな。彼女のあのさびしそうな目は。）」

エルザ（ギルドの奴から聞いた名前）がフェアリーテイルに入ってから少しの日が経った。俺はその間何回も話しかけたが

「私に話しかけるな」

などと一蹴されてしまう。・・・く、つらい。だがめげるな上条当麻。こんなことぐらいでへこたれるようなやわな精神なんて持ち合わせてはいませんのことよ。こんなのいつもの不幸に比べればどうということはないのである。はっはー、はぁ。全然うれしくないのはなぜだろう？不幸だー。

そんなことを考えていると、隣にいたカナが、

「あのコ、いつも一人ね」

その通りだった。エルザはいつでも一人だった。というよりエルザは誰とも関わろうとはしていなかった。ずっと一人でギルドの端っこの方で、座っているだけだった。悲しそうな目をしながら

「じゃあカナが話しかけてみればいいんじゃね？俺が話しかけても拒絶されるだけだし」

と言ってみると、

「私も同じようなものだったよ。完全にシカトされたのよ」

やはりそうだろう。俺だけじゃなく誰でも同じだった。すると

「新入りのくせにグレイ様にアイサツナシってのが気に入らねえな」

そう言って、グレイがエルザの方へ向かっていく。お前はいつから

そんなに偉くなったんだよ！？とも思ったが、そんなことを思って

いると、グレイがエルザに話しかけていた。

「オイおまえ」

そんなケンカ腰にグレイが話しかけていく。

「・・・」

エルザはやはり、何も話そうとはしない。まあエルザじゃ無くても、

そんなケンカ腰に話しかけられれば誰でも関わりたくないと思うぞ、

だがそんな彼女に気の短いグレイが耐えられるはずもない。

「聞いてんのかよぉ。鎧女ァ！！」

そしてエルザの座っていた椅子をどかし、エルザを倒してしまう。

やりすぎだろ！？そんなことをされれば、彼女も黙っているはずが

ない。

「・・・・・何をする？」

「ここは魔道士のギルドだ。鎧なんて着てんじゃねえよ」

「そういうお前は何か着たらどうだ？ここは変態のギルドか？」

「っく！」

「「「「「「「あはははははっ！！！」」」」」」」

二人の漫才のような言い合い？を聞いてみんなが笑いだす。グレイには悪いが、俺もそう思うぞ。

「私にかまうな」

そう言ってエルザがどこかに行ってしまう。はぁ、なんとかしないとな。そう言って立ち上がり、エルザを追おうとする。するとカナが

「どうしたの？当麻」

「ちょっと行ってくる。さすがに心配だからな」

そしてエルザを追う。なにか昔の自分を見ているようなそんな感じをさせてくる彼女を。

くっそー。見失った。エルザはどこに行ったんだ？エルザはたまに一人でいなくなっている時がある。ていうか不幸な上条さんが見つけられるのか？

「はあ、どこに行っちまったんだよ？あのお姫さんは」

ただ走る。彼女を見つけるために。彼女に会って話をするために。
そして、

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

エルザＳＩＤＥ

誰とも関わろうとは思わなかった。行く当てがなかったから、ロブおじいちゃんの入っていたギルドに来たが、誰とも関わってはいけないと思った。誰かと関わるのが怖かった。ジェラールのことや、皆を見捨ててきてしまったこと。そんな考えしかなかった。だが、

「っが」
「きゃあっ！？」

それはいきなり叶わなかった。一人の少年によって。その少年は不思議な感じがした。ギルドに入ってから、誰かに話しかけられても、遠ざけてた。普通なら一回そうしてしまえば、興味をなくして話しかけてこなくなった。だが、

「え～と、エルザさん？今日もいい天気でせうね」

少年は何度でも話しかけてきた。私がどんなに拒絶しようが彼は変わらずに話しかけてきた。何度も何度も。そんな少年が私は怖かった。その少年の温かい笑顔が私の壁を壊してしまうと思ったから。

そう思い、少年のことを一層遠ざけた。

そして、私はいつの間にか河原で泣くのが日課になっていた。昔のこと、そして、今も苦しんでるだろう仲間たちのことを思い。そう、私の心は限界だったのかもしれない。誰か、ヒーローのような存在が現れ、この状況を変えてほしかった。この絶望的な状況を。しかし現実は甘くない。そんな都合よく現れるはずもない。しかし、声が聞こえた。

「はぁ、はぁ、ようやく見つけたぞ。エルザ！」

その声がした方を向くと、一人の少年が立っていた。なぜか、その姿がヒーローのように見えた。この暗闇から自分を救ってくれる、そんなヒーローに。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

当麻　ＳＩＤＥ

「はぁ、はぁ、ようやく見つけたぞ。エルザ！」

河原でポツンと座り込んでいるエルザを見つける。そこには、

「っっ！！」

いつもの凛々しい彼女の姿はなく、ただのか弱い少女が泣いていた。

「・・・・なんだまたおまえか。何のようだ」

涙をぬぐい、聞いてくる。けど俺は、その質問には答えずに、

「なんでお前いつも一人でいるんだよ？」

「・・一人が好きなんだ。それだけだ」

そんな答えが返ってくる。ふざけんな

「だったら、・・・だったらなんでお前一人で泣いてんだよ？」

そう俺が聞くと、少し驚いた表情を見せたが、

「・・泣いてなどいない」

そう言って俺から離れようとする。そんな彼女に俺は、

ガシッ

彼女の手を掴む。離すわけにはいかない。今言わなかったら後悔する。そんな気がした。

「泣いてんじゃねえか。おまえいつも。いつも一人で泣いてんじゃねえかよ」

「・・離せ」

「離さねえよ」

「私に構うなといったはずだ。お前には関係ない」

その言葉で、冷静に言おうとしていた俺に限界が来た。

「ふざけんな」

「え？」

「ふざけんじゃねえよ！！関係ないわけないだろ！！私に構うなだと？構うにきまってんだろ！！」

俺が怒鳴ると、彼女は驚きながら俺を見てくる。

「お前に何があったのかは知らない。お前がどれだけ苦しんできたのかも。どれだけ悩んだきたのかも俺にはわからない。それを俺が聞いたとしても、俺にできることなんて何も無いのかもしれない。けどな、だからって放っておけるわけねえだろ！！お前はフェアリ

ーテイルに入ったんだろ！！フェアリーテイルに入ったらみんなが仲間なんだよ。仲間が苦しんでたら助けるのは当たり前だろうが！！お前が何か抱えてるっていうなら、俺にも背負わせろよ！」

「一人でいるのが好きだと？だったら、こんなところで一人で泣いてる筈がねえだろ！！強がってんじゃねえよ！！」

上条当麻は知っている。昔、自分のせいで周りを不幸にしていると思い、一人で何もかも抱え込もうとした少年を。そんなことをしたところで、何も解決できないということを。だからこそ、『今』の上条当麻は言える。

「お前が抱えてるもの全部俺が背負ってやる。お前を苦しめてるものがあるとすれば、そんなもの今すぐ俺がぶち壊してきてやる！」

どんな幻想をも殺せる右手を強く握りしめ

「それでもまだお前が一人で苦しむ、そんなくだらない想い（げんそう）を抱き続けるっていうなら、その幻想は跡形も残さずぶち殺してやる！！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

エルザＳＩＤＥ

なぜなんだ？彼はなぜ私をここまで想ってくれるのだろうか？仲がいいというわけではない。昔からの知り合いというわけでもない。ただ最近知り合った。それだけの仲だった。そして彼を私は拒絶し続けてきた。そんな私になんで、彼はこんなにも

ぽたぽた

気が付くと私は泣いていた。今まで押し殺してきたものが崩れた。いや、彼によって崩されたのだろう。気づくと、私は彼の胸へ飛び込んでいた。そこでただ泣き続けた。そんな私を彼は、優しく包み込んでくれていた。右手で私の頭を優しく撫でながら。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

当麻　ＳＩＤＥ

エルザはずっと泣き続けていた。今までどれだけ我慢し続けてきたんだろうか？どうしてもっと早くわかってやらなかったのだろうと、自分に腹が立ってくる。だけど、やっと彼女と、エルザという一人の少女を見ることができたような気がした。今はそれだけで嬉しく思えた。

・・・しかしいつまでこうしていればいいのだろう？冷静になってみると、なんというか、エルザから女の子特有の甘いにおいが漂ってきて、つまりその～どうしよう？

「（落ち着け～落ち着くんだ上条当麻。エルザは今、苦しみからやっと解放されたところなんだ！そんな状況で俺は何を考えているんだぁーそうだ。こういう時は素数を数えるんだ。えーと1，2，3，4、…）」

もうすでにパニック状態になっている上条当麻だったが、

「・もう大丈夫だ。ありがとう。？なぜそんな顔を赤らめているんだ？」

パニック状態になっていて気づかなかったが、エルザは泣き止んで俺から離れていた。

「っは！いやいや、何でもありませんのことよー。エルザさん、上条さんは別に、あーエルザさんっていい匂いがするなーとか、そんなふしだらなことは考えてませんよーって、っは！？」

言い終えると、エルザが冷たい視線で俺を見ていた。

「しまったー？自分で墓穴を掘ってしまったのかー！」

そういって、髪をくしゃくしゃしながら、うなだれると

「ふふっ」

エルザが笑っていた。それはとてもきれいで見たものを虜にする笑顔だった。当然それを始めてみた俺も見つめる形になってしまい、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ん、なんだ？／／そんなに見つめるな」

「・・・ああ！！ごめん。いやエルザは笑ってた方が可愛いぞ。うん」

俺がそういうと、元から赤かったエルザの顔がさらに赤くなる。こういうことを言われることは慣れていないらしいな。ってこんなことを言っている場合じゃねえだろ。

「それでエルザ。お前はいったい何を抱えてんだよ？」

すると、エルザは赤くなっていた顔はすぐに、悲しみの色で塗りつぶされていった。

「・・・やはり言えない」

っな、まだこいつは

「まだ自分一人で抱え込む気かよ？そんな「違う！そういうわけじゃない。ただまだ言うわけにはいかない。たのむ。私が言えるようになるまで待ってくれないか？頼む！」っく！」

そんなことをそんな悲しい顔で言われれば、俺が言えることは一つだけだった。

「はあ～わかったよ。けど話せるようになったら真っ先に俺に言えよ」

「ああ！！ありがとう。お前のおかげで少しだけ前に進めた気がする」

笑顔で俺に言ってくる。少しでもエルザの役に立てたのだろうか？それならよかったのか？そしてなにより

「うん！エルザはやっぱり笑顔でいた方がいいぞ。そうすればきっとモテるぞ」

この笑顔を見れたのだから、俺が言ったことも無駄じゃなかったのだろう。

「／／／／う、うるさい！」

そう言って赤くなった顔をそっぽを向いてしまう。今まで拒絶されてきたお返しと言わんばかりに、俺は調子に乗る、

「はっはー可愛いぞ。エルザさん！チョー可愛い！世界一！やっ

ッザシュ

そんな音がした、なんだろう？状況を確認してみると、俺の頬の皮膚が切り裂かれていた。

まさか、と思いエルザの方を見ると、

／／／／／／／／

顔がこれでもかと言わんばかりに赤くなっていて、そしてエルザの右手にはどこにあったんですか？と聞いてみたくなるような剣が握られていた。

「・・え～とエルザさん？その剣はいったいどこからだしたでせう？ていうか、照れ隠しで剣を振り回すなよ！？剣をむやみに振り回してはいけません！！そんなので斬られたら本当に死んじゃいますよ！」

何とかエルザを正気に戻そうとするが、頭が処理落ちしてしまったらしく、俺の話は耳に入ってはいないようだった。そして、

「換装！」

そう言うと、エルザの体が光りだした。いったい何をしようとしているんだ？このお姫様は！？光が解けるとそこにはさっきまでの鎧は無く、とてもきれいな鎧を纏ったエルザがいた。それはいい。だが、なぜ彼女は俺の方へ向かってきているんだー

「待て！？エルザ！！なぜあなたは俺に向かってきているんでせう！？落ち着こう！とりあえず落ち着きましょう！てか落ち着いてください！！さっきのことは謝ります！調子に乗ってすいませんでしたーー！！だから命だけはー」

頑張って命乞いしてみるが、やはりというべきなのか彼女の頭はま

だ機能していないらしく俺の方へ向かってくるのであった。剣を持って。不幸だー

しかしやられるわけにもいかないので、何とかエルザの剣を必死に避ける。その時に俺の右手がエルザの鎧と一瞬ぶつかる。これがまずかった。俺の右手は異能の力なら何でも消すことのできる力で、エルザの鎧は魔法の鎧。つまり何が起きてしまうかと言うと、

ビキィンッ

そんな甲高い音がした。なんだろう？そう思いエルザの方を見ると、すらっとした体・・少しふっくらとした胸・・きれいな脚がそこにはあった。

つまり俺が何を言いたかったのかというと、何も纏っていない、生まれたままの姿の彼女がそこにいた。

「っう～ん！私は何をっっっ！！！！／／／／／／／／／／／／／／／」

タイミングよくエルザが再び起動してしまう。そしてエルザは自分の姿を見つめ、顔を赤らめつつ絶句してしまう。そして、フルフルと震えながら、新しい鎧を身にまとい、そして静かに俺の方を睨み、

「いや待ってくださいよっ！？？これは確かに上条さんのせいでもあるが、いきなり襲ってきたあなたにも非があると思うのですが？？これで俺が一方的にやられるのは理不尽だと思うのですが！？？だから、あの、できれば、怒りを少しでも沈めてくれれば・・・」

もうエルザには俺の言葉は頭に入っていないようだ。ただ、目の前にいる俺を斬ることだけを考えているようだ。はは、なんていうか、あれだな

「不幸だーーーーーーー！！！！」

そんな叫び声の後に、一人の少年の絶叫が辺りに響いたのだった。

第6話～不幸な少年の日常～（前書き）

どうもです。今回は少し短いです。

では投稿です。

第6話〜不幸な少年の日常〜

当麻　ＳＩＤＥ

先日、エルザ様が鬼神のごとき力で俺に襲いかかり、生死をさまようことになった私上条当麻だったのだが、命からがら逃げることができたのであった。そんな俺にエルザは

「／／／／貴様が私を裸にしたのが悪い！！」

そんなことをギルドの中で大きく叫ぶものだからギルド全員から、

「「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」」」

そんな静かに殺意を込めながら睨まれましても。上条さんにだっていろいろあったんですよ！！しかしそんな俺の心の声は届かず、

「また当麻が何かやったのか！？」
「あいつ不幸不幸言いながらおいしいところは持っていきやがって！！」
「あいつ、いずれ女たらしになるんじゃねえか！？」
「このラッキースケベ野郎が！！」

好き勝手言ってやがる。よし！後で全員ぶん殴ってやろう！密かに誓う上条だった。

しかし、それからずいぶん俺の扱いはギルド内の底辺をさ迷ったの

だった。

不幸だーー

だけどそんな俺にも良いことはあった。あの出来事から、エルザが少しずつ変わっていったことだ。誰かを遠ざけようとはせずにしっかりみんなと向き合う様になっていた。そんなエルザを見て俺は微笑ましく思えた。彼女の問題は根本的には解決していないのかもしれない。だけど、少しでも彼女の救えたのなら、よかったのだろう。

だが、

やはり俺はどこまで行っても不幸な少年だった。このままハッピーエンドだったならどれだけよかったのだろう？しかし俺にそんな甘い結末は訪れない。

「こら当麻。最近貴様はたるんでるぞ！！」

そう。あれからエルザは、学校に一人はいそうな委員長キャラになっていた。ギルドがうるさければ注意したり、必要ならば武力行使で静めていた。まあそこまではいい。俺もギルドが少し静かになっていいと思うぞ。だがなぜ、俺だけ特に何もしていなくても、注意されるんだ！？

「あの～、えるざさん。上条さんは特に何も悪いことはしていませ

んが？」

「いや貴様はたるんでいる！！顔がそう言っているぞ！」

「顔ですか！？そればかりは治しようがないだろ！？そこを文句言われたら何も言えねえよ！！」

そんな言い合いがまた始まる。最近は見慣れた光景だった。エルザは何かある事に俺に突っかかってくる。やっぱ嫌われてんのか？

「はぁ～ふこうだー」

「むっ！何が不幸なのだ？当麻！」

「べっつにー何でもありませんよー」

後ろでエルザがまだぎゃーぎゃー言っている、はぁ～俺にはやっぱり平穏な日常なんてものは送れないんだろうな～くっそー！俺が静かに人生を諦めていると

「お前ら本当仲いいのな。付き合ってんのか～？」

いきなりグレイが来て、にやにやしながらそんな見当違いなことを言ってくる。

「／／／／つ、付き合ってなどいない！な、な、何を言っているのだグレイ！？？／／／／」

エルザがどもりながら、反論している。なんでこいつは顔を赤くしてるんだ？

「そうだぞグレイ！そんなラブコメ的展開なんてエルザさんとはあり得えないだろっ！なあエルザ～って！？なんでおまえはそこで静かに剣を出しているんだ！？」

今のどこに怒るところがあったんだ！！？？エルザは俺に言われ、嫌々剣をしまったが、なぜか体を震わせていた。何を怒っているんだ？

「っく！！当麻、今日当麻は私と仕事を一緒に来てもらうぞ！！」

「・・えーとエルザ？今までの会話のどこに俺とお前が一緒に仕事に行くなんて流れがあったんだ？」

今日の俺はギルダーツとの修行も無いし、久しぶりの休日を送ろうとしているのだ。邪魔されるわけにはいかねえ。

しかし俺の決意など簡単にもろく崩れ落ちるのだった。

「つべこべ言わずに行くぞ！！」

そう言って俺の襟首をつかみ引きずりながら歩いていく。

「待ってー！誰か助けて～！！グレイ、俺たち仲間だよな！？なっ！？」

「・・・・・・・」

俺がそういうと、俺無関係と言わんばかりに無言で俺から目をそら

しやがった。後で一発ぶん殴ってやる！！

「待って！！エルザ。いやエルザ様。頼むから俺を少し休ませてくれ。上条さんのライフはもうゼロよ！？仕事とギルダーツの修業が続いて、ろくに休みが取れなかったんだよー！！仕事なら今度行ってやるから、な！？」

「そうなのか・・・・ならば

そう言ったエルザの顔は、慈愛に満ちた笑顔を見せていた。まるで聖母様のごとく。その笑顔を見て少し安心した。

が

死ぬ気でやるんだな！」

「やっぱりそういう展開！？おい、無言で歩いていくなー！！てか、ギルド全員憐れみの目で俺を見るんじゃねえ！！くっそー！やっぱりあれだな。言いたくなかったけど、言うぞ！はい皆さんご一緒に～

不幸だーーーーーーーーーーー！！」

そんな少年の叫び声がギルドに響く。今日も少年にとって平和？で不幸な1日が始まる。

第7話〜少年の想い〜

当麻ＳＩＤＥ

「ぎゃあーー！！もうなんなんですか！？この不幸はー？」

私(ワタクシ)こと上条当麻は今絶賛逃走中！である。なぜ俺がこんな状況になっているかと言うと、

久しぶりの休日に胸が躍っていた俺だったのだが、それはいきなり突っかかってきたエルザによって邪魔され、そしてそのまま仕事に連れていかれる羽目になったのだ。その仕事とは、バルカンと言うモンスターの討伐だった。ま、エルザが一緒だし楽勝だろっ！

・・・なんて思っていた自分を殴りたくなった。なぜなら目的の場所へ着くと、

「「「「「「ッウホ！！？」」」」」」

大量のバルカンがそこにいた。はぁ、不幸だー俺はそんなことを思って肩を落としていた。

だがエルザは、そんなバルカンにも怯えることなく斬りかかっていた。襲ってくるバルカンたちを斬って斬って斬りまくっていた。

「すげーなーエルザは」

俺がそんな感想を述べていると、急に大量のバルカンたちが俺の方を向いた。

・・・・・・

少しの沈黙の後、一斉に俺に襲いかかって来やがった、。そんな大量なモンスターに俺が太刀打ちできるはずもなく、逃げることになったのだった。

「くっそー！！来るなら一対一で来やがれ！！このくそザルどもー！！」

俺は全速力で逃げながら、自分の右手を見つめる

幻想殺し（イマジンブレイカー）

俺の右手に宿っている摩訶不思議な力。それが異能の力なら、触れただけで破壊することができる力。だがこんな素晴らしい力もこのモンスターには何の効果もないのである。六体くらいまでなら力で何とかなりそうだが、それ以上にもなると、さすがにきつい、だがこのまま逃げてても埒が明かないので、

「どこか、戦える場所はねえのか！？どっか狭い場所は？」

そう言いながら、辺りを見回すと、狭い一本道のような場所を見つけた。

「ここだ！！」

そこになんとか入り、足を止め、振り返る。そこには、何体ものバルカンたちがいた。そして狭い一本道に入ってくる。顔は追いつめたぞと言わんばかりの表情だった。そして一体が襲い掛かってくる。だが、

ドゴッ！！

鈍い音がした。そして襲ってきたバルカンが吹っ飛んでいく。何をしたか、簡単だった。ただ俺が殴っただけだ。吹っ飛んで行ったバルカンを見ていたバルカンたちも襲ってくる。俺はそれをさっきのバルカンと同じように殴って倒していく。

簡単な話だった。上条当麻は数で襲われたら絶対に勝てない。しかし、一対一ならモンスターになんて負けることはない。ギルダーツとの修行で鍛えられているからだ。だから、上条は一対一で戦える状況を作り出しただけだった。狭い道なら、一斉に襲われることもない。そして、

「オラッ！！これでラストだ！！」

最後の一体も同じように殴って倒す。そのままバルカンは倒れたままだ。おそらく気絶したのだろう。

「はあはあっ。たくやっとおわったー！」

倒れているバルカンたちを見ながらぼやく。何とか勝てたけど、体はボロボロ。いくら一対一なら勝てるといっても、俺の武器は拳しかない。あれだけの数のバルカンたちと戦えば傷がつくのは必然だろ。まあ、いつものことか。などと、考えるのをやめ、

「さぁってー！エルザも終わってるだろうし、とっとと帰りますかー！いやー、上条さんにしては珍しく何もなく終われそうだー！」

そう。俺が仕事に行くと必ずと言っていいほど何かに巻き込まれる。やはり俺の不幸はどこまで行っても変わらないものなのだろう。そして、それは今回も起きる。

「っぐはあああああああああああああ！！」

突然の声。それは悲鳴だった。そしてその声には聞き覚えがあった。

「っな、なんだ今の！？今の声、エルザか！？」

おかしい。エルザが今もバルカンたちと戦っているとは思えない。俺は逃げながら戦っていたため、かなりの時間がかかった。だがエルザは逃げることなく、斬りつづけていたからだ。ならば今の悲鳴は、

「！！っくそ！無事でいろよ。エルザ！！」

すぐに走り出す。仲間を守るために。大事な人を助けるために

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

エルザＳＩＤＥ

すべてのバルカンたちを倒し、一息つきながら

「ふぅ、当麻はどこまで行ったのだ？まったく世話の焼ける奴だな」

微笑みながら、そんなことを言っていると、ヒュンッ突然折れた木が高速で飛んできた。くっ！

何とか木を避け、

「何者だ！？出てこい！！」

すると、そいつは何気ない顔で出てきた。

「へぇ！よく避けれたな。さすがは正規ギルド様だな」

そこには、見覚えの無い男がいた。

「なんだ貴様は？なぜいきなり攻撃してきた？」

男はかったるそうに答える。

「あぁー理由かー。そんなもんはねえよ！ただ俺はてめえら正規ギルドがうぜえだけなんだからよ！」

そう言い男は笑いだす。どうやら、話し合いでは解決できそうにないな。

「ならば、私に斬られても文句は無いのだな？」

「ああ！文句なんてねえよ。ただおまえに俺が斬れるならな！！」

そして男が私に向かって走ってくる。ならば、

「換装　天輪の鎧」

同時にいくつもの武器を操ることのできる鎧。鎧の周りに浮いている剣を一斉に男に向けて放つ。男はそれを見て、

「ハッ！」

なぜ笑っている！？そう疑問に思う。だがその答えはすぐに出た

「そんなもんは効かねえんだよ！！」

男の体に剣が当たった瞬間弾かれていく。一本残らずに。こいつまさか魔法を！！？

「オラァ！！」

気づいたときは遅く、男はすでに懐へ入り、拳をぶつけて来た。この衝撃！？

何メートルも飛ばされ、大木にぶつかりようやく動きが止まった。

「っぐはあああああああああああああ！！」

「（なんだ今の！？奴の拳、硬いなんてレベルじゃなかった！それが奴の魔法！？）」

「気づいたみたいだな」

森の奥から男が歩いてくる。

「俺の魔法は体を硬くすることのできる魔法。それは鋼鉄以上にだってなれる。当然、攻撃力も上がる。そんな拳を受けたんだ。無事で済むわけねえよな！！ギャハハハ」

確かに今の一撃を喰らってはいけなかった。鎧も砕かれ、体の骨も何本もやられた。立つことすらままならない。それに、バルカンたちとの戦いで魔力もあまり残ってはいなかった。

だが、ここで死ぬわけにはいかない。仲間のためにも。そして、やらねばならないこともある。

「ほう！今の一撃を喰らって立ち上がるのか。いいねえ、くそガキ

！ならもっと楽しませてくれ！」

そして、私を救ってくれたあの少年のためにも。

「はあぁっ！！換装　黒羽の鎧」

一撃の威力を高める鎧。この一撃に全てを賭ける！

「はあああああああ！！」

私の剣と奴の体がぶつかり甲高い音が鳴り響く！そして

「っ！？」

「残念だったなぁ！俺の体は少し傷ついただけだぁ！」

斬れなかった！？く、さっき喰らった一撃の痛みで力を出しきれなかった！？

「くたばれ！正規ギルド！！」

男の拳が襲い掛かる。今の攻撃で体がまだ！

・・・ここまでなのか。仲間も見捨てたまま、ジェラールも助けら

れずに

「（当麻！）」

少女は一人の少年のことを想う。そして、その想いは確実に少年に届いた。

「エルザァーーーー！」

ドガァ！

殴られた音がした。だがそれは私では無かった。飛び込んできた少年が男を殴り飛ばしたのだ。その少年が誰かなんて考えるまでもなかった。当麻だった。当麻は倒れこむ私を抱えながら

「待たせちまったみたいだな！もう大丈夫だ」

当麻は私の顔を見て、微笑みながら言った。その顔を見ながら私は意識が遠くなるのがわかった。意識が無くなる前に当麻が何か言ったのが聞こえた。私は確かに聞いた

「ゆっくり休んでてくれ！あいつは俺がぶっ飛ばす！」

私のヒーローの声を。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

当麻ＳＩＤＥ

抱えていたエルザを地面に優しく寝かせ、倒れている男を睨みつけ、怒りを隠さず、怒鳴る！

「てめえ！エルザに何をした！？」

倒れている男は鼻血を拭いながら、俺の方を見ながら、

「っぐ！俺があのガキに何をしたかって！？簡単だよ。ただぶん殴ってやっただけだよ！」

「なんだと！？エルザがお前に何かしたのか！？俺たちがお前に何かしたってのかよ！！」

「なにもしてねえよ！ただあいつが正規ギルドだった。それだけで充分なんだよ！むかつくんだよ！てめえらみたいに大して力もないくせに偉そうにしてやがるギルドがなぁ！てめえも正規ギルドならつぶしてやるよ！あのガキの様になぁ！！ハハハ！」

「・・・・ふざけんな！」

「ああ？何か言ったか？くそガキ」

「ふざけんじゃねえよ！てめえが俺たちギルドの何を知ってるってんだ！！確かに、俺たちは強くないのかもしれない。俺なんて、魔法も使えねえしな！だけどな、それがどうしたってんだ！もし自分が弱かったら、仲間を頼ればいい！！それがギルドなんだよ！たったそれだけの話じゃねえか！！それを、てめえみたいなやつにバカにされてたまるかよ！」

「ははは！うっぜえガキだな！てめえみたいな奴が一番むかつくんだよ！そんなに言うなら俺を倒してみろよ！」

言い終わると、男が走ってくる。同じように俺も駆け出す。そして、お互い拳を突き出す

ドゴォ！

一瞬、俺の拳の方が早く男に当たり、男が吹っ飛ぶ。男は驚いているようだった。まるで、こんなことになるはずがないと、言わんばかりの顔をしていた。

「（なんだあいつ！？俺の体は鋼鉄以上の硬さなんだぞ！それを普通に殴り飛ばしただと！？）」

「どうした？まさか殴られたことがないなんて言わねえよな！」

「っぐ！？なんなんだよてめーは？」

男が叫びながら、俺に突っ込んでくる。だが、さっきの動きでわかった。こいつは別に強くなんてない。体に何かしらの魔法を使っているのだろう。さっき殴った時、右手が反応したからな。だが俺にはそんなものは関係ない。俺は男の拳を避け、再び拳をぶつける。そしてそのまま右手で男の体をつかみ、追撃する。

「っがあ！ぐっ！なんなんだオマエ？」

「教えてやる義理なんてねえんだよ！！」

もう一度拳をぶつけ、男が倒れこむ。そして男はフラフラになりながらも、立ち上がり俺の方を睨んでくる。

「っ！てめー何者なんだよ！？」

「うるせえよ！俺が何者かなんてどうでもいいんだよ！大事なのは、お前が俺の大切な人を傷つけ、俺達のギルドを馬鹿にしたことだけなんだよ！正規ギルドだから許せねえだと？ふざけんな！だったら、直接俺たちのギルドに来ればいいだけだろ！それをしないで、こんなところで女の子一人をボロボロにして、結局、てめえはただ、他人を傷つけたかっただけじゃねえか！そんなてめえに、俺たちのギルドを馬鹿にする資格なんてねえんだよ！」

そして、一気に駆け出す。右手をこれ以上ないというほどに握りしめながら

「いいぜ！てめえが自分勝手な理由で誰かを傷つけるっていうなら、まずはその幻想をぶち殺す！！」

ドゴォン！鈍い音がする。そして男はそのまま倒れ、立ち上がらなかった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

エルザＳＩＤＥ

「っんぅ？」

目が覚めると、すでに日は沈みかけていた。ここはどこなのだろうと、意識を覚醒しようとしていると、

「おお！目が覚めたかエルザ！よかった。体は大丈夫か？」

聞き慣れた声がした。当麻だった。いったい何があった？何があったか思い出す。

・・・

そうか。私はいきなり襲われ、そのまま気絶してしまったのか。まだまだ、鍛錬が足りないな。そんなことを考えていると、ふと疑問に思う。

なぜ、私は自分の足を動かしていないというのに、景色が動いているのだろう？

なぜ、当麻の声がとても近くから聞こえたのだろうか？

答えはすぐに出た。

「当麻、なぜおまえは私のことをおんぶしているのだ？」

「んん？なんでって、エルザが気絶した後、あいつをブッ飛ばして軍に引き渡してから、エルザを起こそうとしたらなんか気持ちよさそうに寝てたから起こすのも気が引けるなーって思って、だったらおんぶするしかないかってなったんだよ」

「っな！？と、当麻！貴様私の寝顔を見たのか！？／／／／」

「？ああ見たけどそれがどうかしたのか？」

「な、なんでもない！／／」

く、なんでこんなにも心臓がバクバクしているのだろう？他の人にやられタラ何も感じないことでも、当麻にやられると、なぜかドキドキしてしまう。なぜなのだ？

そのことを他の人に聞けばそれは恋だろ！と簡単にわかるのだが、この少女がそのことを理解するにはまだ幼すぎるのだろう。

「それにしても起きてくれてよかった！なあエルザ、後で返すからさ、エルザのお金で列車で帰らないか？実は、上条さんの財布、ポケットに入れてたはずなんだけど、気づいたら無くなってたんだよ！で、エルザに借りようとしたんだけど、どこにあるのかなんてわ

からなかったからさ」

「そ、そうなのか。って、当麻！？／／／お前私が寝ている間に私の体に触ったのか！？／／／」

「いや、なんで顔を赤らめてるんだよ！？違いますよ！紳士であるこの上条さんがそんなことするわけないだろ！？だから、探すのはあきらめて、こうしてこの遠い距離を人一人背負って歩いてるんだよ！」

「そうか。ん？だがもうずいぶんマグノリアに近いところまで来ているじゃないか。これなら歩いてもいけるんじゃないか？」

「・・・あの～エルザさん？上条さんは朝からあなたに仕事に連れて行かされ、大量のバルカンと戦う羽目になったり、いきなり出てきた魔道士とも戦う羽目になったり、この長い距離を人一人背負って歩くだの、すでに体はボロボロなんですが？歩いていくなら、せめて俺から降りてくれませんか？」

「む！当麻、それは私が重いということか？」

「ああ重いぞ。だからどいてって痛えぇ！痛いですよエルザさん！なんで無言で俺の首を絞めるんだよ！死ぬ！マジで死んじゃいますよ！？だから離して！いや、離してくださいーー！」

そう叫ばれ、私は嫌々離す。だが当然私の怒りは静まっていないので、

「当麻、このまま私を背負って歩いていってもらうぞ！」

「いやなんでだよ！？だから俺「なんだ？文句があるのか？」・・・・・・・いえ、何もないです、ハイ」

当麻は肩を落としながら、とぼとぼ歩いていく。そんな当麻の背中で私は

ぎゅっ

優しく背中から彼に抱き着いた。なぜだか、こうしたくなった

「エ、エルザさん！？いきなりどうしたんでせう／／」

「少しこのままでいさせてくれ」

そう言うと当麻は、少し微笑みながらうなずいた。

そうして二人は帰っていく。

二人の家、フェアリーテイルへ

第8話～竜の子～（前書き）

前の事件から一年近くたちます。

では投稿です。

第8話～竜の子～

当麻ＳＩＤＥ

「はあ、平和っていいなー」

私(ワタクシ)こと上条当麻は今、フェアリーテイル近くの河原で寝っ転がりながら平和を満喫していた。ここ最近は何事もなく、のんびりとした生活を送っている。

まあその間にも、エルザに無理やりいろいろなものに付き合わされたり、グレイやカナと一緒に仕事に行って厄介ごとに巻き込まれたり（二人は俺のせいにしてきた）、マスターに無茶な仕事を押し付けられたりと、日常的な不幸は続いていたが、まあ俺からすればそんなものはいつものことなので気にすることではない。しかしなぜだろう？今日は何か起こりそうな気がした。

「（なんなんだろうな？まさか、いきなり空から女の子が降ってくるとか！？」

・・・・・・・・・

はぁ、ありえませんね。不幸で有名なこの上条さんにそんな幸せルートは存在しませんよねー！）」

などと、現実味の無いことを考えながら、俺はフェアリーテイルに帰ることにした。

フェアリーテイルに帰ると、扉の前にはマスターと俺と同い年ぐらいの少年がいた。その少年は髪が桜色、首には鱗みたいなマフラーをしていた。そんな少年を見て、俺はなぜか思った。

「（なんなんだ！？あいつに関わると、ろくなことが起きない気がする。例えば、毎日毎日勝負を挑まれたり、一緒に仕事に行ったらいろいろ壊して俺のせいになったり！？そんな不幸に巻き込まれそうな予感がする！・・・・よし。関わらないようにしよう！）」

そう心に誓い、ここから離れようとした俺だったが、やはり上条当麻はどこまで行っても上条当麻だった。

「おお、当麻！どこに行っとった？」

マスターに話しかけられてしまう。

・・・・なんで見つけてしまうんだよ！泣きそうな顔でマスターを睨みつける！

しかし無視するわけにもいかないので

「ぉおぅ！マスター。こんなところで何をしているんでせう？」

「ちょうどよかった！これから新しい仲間が加わるぞい」

そう言われると、少年が俺の前に出てくる。

「おう！俺はナツだ！よろしくな。」

そう言い、素晴らしい笑顔で手を差し出してきた。ここまで言われてしまったら、断るわけにもいかず、

「あ、ああ。俺は当麻。上条当麻ってんだ。よろしくな！」

そして俺も同じように右手で握り返す。すると、ナツと言うらしい少年が怪訝そうな顔をした。

「？どうした？」

「いや・・なんかお前と握手してると、変な感じがするんだよなーなんか俺が俺じゃなくなるみたいだ。お前気持ちわりーな」

そう言い俺の手を振りほどく。

「なんで！？なんで俺、会ったばかりの奴に気持ち悪い呼ばわりされてるんだ？握手しただけだろ！？はぁ、不幸だー」

俺が落ち込んで地面に屈みこんでいると

「ほれ当麻！お前さんが不幸なのはいつものことじゃろうて。とっとと、フェアリーテイルに入るぞぃ。みんなにも紹介せねばならぬからのう！」

「そう言いながらなんで俺を引っ張ってんだ！？自分の足で歩けますよ！？

・・・・

ってやっぱり俺の話は無視ですか！？ほら、ナツが不憫そうな表情で俺を見てるし、ああもう不幸だー！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

そうして俺達はフェアリーテイルに入って行った（俺は引きずられながらだったが）

するとナツは辺りをキョロキョロしながら、

「すっげーな！よくわかんねーけどすっげー！！」

と興奮しているようだった。俺もそんな感じだったなーと昔に浸っていると、

「ああ、なんだテメーは？目つきわりーな」

早くもグレイがケンカを売るようにナツに話しかけていた。するとカナが、

「グレイ！服」

そうツッコむと、グレイはまたしても服を脱いでいることに気付いていなかったらしく慌てていた。それを見てナツは、

「なんだよ！変態かよ」

当たり前の感想を述べている。しかし、それを聞いて黙っているグレイではない。

「誰が変態だ！このツリ目！」
「お前のことだよ！このタレ目！」

会ったばかりでケンカが始まった。どんだけ相性が悪いんだ！？この二人は！だけどまずい！このままケンカをしていると、あの委員長様が！そう思い、ケンカを止めに行く。

が、

「やめないか！二人とも！」

・・・遅かった。すでにエルザが二人のケンカを止めに入った。だがエルザの恐ろしさを知らないナツが

「なんだよ！？やんのかコラァ！」

バカかぁ！？バカなのかぁ！？バカなんですね三段活用！！何とか止めないとナツが殺されてしまう！

ドガァ　バキィ　ドン

しかし間に合わず、当然のようにナツがやられ、なぜか俺とグレイもやられる羽目になった。

「「なんで俺まで！？」」

はもる俺達だった。俺達を殴り飛ばしたエルザは、そんな俺たちを気にせずナツに話しかけていた。

「いいか。フェアリーテイルに入ったからにはみんなが仲間だ。そしてここはみんなの家だ。家はケンカをするところじゃない。わかるな？」

・・・・なんてことだ！？エルザが、あのエルザが珍しくまともなことを言っていた。だが俺をあれだけボコボコにしてたりしているのによく言えるよなー「む、当麻！今何か私に対してとても失礼なことを考えていたな！」

なんでわかるんでせう！？人の心を読めるのか！？エルザがどんどん人間離れしている気がする。昔は可愛かったのになーなどと、昔のエルザを思い返していると

チャキ

なんで首に剣を押し付けられているんだ！？

「／／と、当麻！今ふしだらなことを考えたな！？」

「いえ、な、なんでもありませんです。ハイ！」

即座に土下座モードに入る。なんで俺の考えを当てられるのかは考えないようにしよう。そう思いながら視線をナツたちに向けると、

「こえーエルザ」

「だろ！あいつには刃向かうことはしない方がいいぜ！」

ケンカしてたと思ったら、変なところで気があったりしている。しかし

「そういえばナツ。お前どんな魔法を使うんだ？」

それが気になった。ここに来るのだから何かしらの魔法を使えるのだろう。

・・・まあ、ここに例外が一人いるわけだが

「おお！さっきの気持ち悪い奴！俺は滅竜魔法を使うんだ。すげーだろ！！」

「めつりゅうまほう？いったいなんでせう？それは？あと、俺のこと気持ち悪い奴って呼ぶな！！」

「なんだおまえ？滅竜魔法知らねえのか？滅竜魔法はな、竜迎撃用

の魔法だ！！」

・・・・・・はい？

「えーと、ナツさん？りゅうっていうのはまさかドラゴンのことでせう？あの翼とか牙とかあるあのドラゴンのことなのか！？」

「おう！俺はその魔法をイグニールに教えてもらったんだ！」

「いぐにーる？？」

「イグニールは本物の竜だ！すげえんだぞ！イグニールは！！」

・・・・はぁ、今度はドラゴンですか。にわかには信じられないけど、俺みたいな変な力を持った奴がいるのなら、他にもおかしなことがあっても不思議じゃないのか？たとえそれがドラゴンであっても

ギルドの奴ら全員は静まり返っていた。それにしても、鎧女騎士の次はドラゴンと来ましたか。なんか凄いことになってきてるなー。このギルドはいったい何を目指してるんだ？まあ俺も普通じゃないけど

「・・あれ？でもドラゴンにその魔法教わったんだよな？ドラゴンがドラゴンを倒す魔法を教えるって変な話だな」

「ッ！！」

「気づいてなかったのかよ！？」

はあ、もう疲れてきた。それにしても

「なあナツ？それは本当のことなのか？」

すると疑われて、機嫌を悪くしたのか

「本当だ！嘘だと思うならお前、俺と勝負しろ！見せてやるよ！滅竜魔法！」

・・・なんでいきなり戦い？しかしこの展開はやばい。そう思いすぐさま反論しようとするが

「おお！ケンカか。やれやれー」

「なんだ？また当麻がなんかやったのか？」

「おもしれーな！竜殺しと幻想殺しがケンカすんのか？」

外野はもう俺とナツが戦うことが決まっているかのように騒ぎ出していた。そしてそれは

「おお！確かに一理あるな！当麻、戦ってこい！」

と、何か納得したようなエルザ

「はは！また不幸な展開だなー当麻」

と、笑いながらグレイ

「なんていうか頑張って」

と、哀れむような表情のカナ

こいつらも同じらしい。またこういうことになっちまうのか！？

「待ってください！！ナツの話を聞いてましたか！？竜殺しだぞ！竜殺し！！そんな奴と普通の人間であるこの俺が戦えば俺の肉体がバラバラになっちまうだろうがー！！」

がやがや　わいわい

「・・・あの、みなさん？もう既に俺達が戦うみたいな空気はやめていただけませんか？」

当たり前と言うべきか、すでに俺の話を聞いている者はおらず、既にみんな外に出ていた。戦う本人であるナツも

「おっしゃー！燃えてきたぞ！！」

やる気満々！状態だ・・・どうにかして逃げなければ！！

そうも思ったが、上条当麻は知っている。経験則で知っている。こういう展開になったら俺は逃げられないということを。従って俺が言うべきことは一つ

この理不尽に、訴える一言を叫ぶ

「やっぱり不幸だー！！」

第9話～猛る炎と荒れ狂う雷～

当麻ＳＩＤＥ

「はぁー、なんで俺がこんな目に？」

駄々をこねていた俺だったが、結局外に追い出されナツと戦う羽目になってしまう。それで肩を落としている俺とは違い

「行くぞ！ボッコボコにしてやるよ！！」

ナツはやる気十分らしい。あいつは戦闘マニアか何かですか？ここまで来ちまったらやるしかねえのかなー

「はぁ～わかったよ！そんなにやる気だっていうなら、いいぜ！かかってきな！！」

そして右手を握りしめる。そこでふと思う。

「（あれ？滅竜魔法ってのに俺の右手は効くのか？）」

考えてみればそうだった。今までどんな魔法ですら消してきた俺の右手だが、竜を殺すっていうスゲー魔法にも、通用するのか！？

あれ？もしかしてやばい！？もし右手が効かなかったら、本当に上条さんの体がバラバラに！？そんなことを悶々と考えていると

「では、始めるかの！それでは始め！！」

ってマスター！！始めるの早すぎるだろーー！っく、やるしかねえのか。ナツの方へ意識を向けると

「いっくぞー！！ふぅぅぅ！！」

なんだ？思い切り空気を吸ってる？何が出てくるんだよ！滅竜魔法ってのは？

「これで吹っ飛べ！火竜の咆哮！！」

「っな！？？」

思わずそんな声が出てしまう。それほどまでに衝撃的だった。口から炎を出しやがった！！これが滅竜魔法！？

驚いている俺に避けている暇なんてなく、俺の視界は炎に包まれ、爆発が起こる。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ナツＳＩＤＥ

爆発が起こった。俺の攻撃であいつは吹っ飛んだろ！

「見たか！！これが滅竜魔法だ！！」

俺は胸を張りながら、倒れているだろうあいつに向かって言う。当然返事は返ってこなかったが

ギャラリーはなぜか驚いているようだった。なんで？

「おいおい！？見たか？今口から炎出したぞ？」

「あれが滅竜魔法っ？」

「ていうか当麻は大丈夫なのか？」

「おいおい！？当麻！」

まあいいか！

「がははは！俺の勝ちだな！！」

俺は全員に向かって言った。それにしても、あいつなんだったんだ？なんか変なにおいがしたから最初から全力でやったけど・・・まあどうでもいいか！！

そして煙が晴れていく。あいつが倒れているだろう。

・・・しかしその予想は裏切られることになる。

「誰が・・・誰が勝ったって？俺はまだやられてねえぞ！」

そこには、俺の咆哮を喰らったはずなのに、無傷で立っているあい

つがいた。

「お、お前なんで立ってんだ！？俺の咆哮を喰らって！！？」

するとあいつは不敵に笑いながら

「そうだよな・・・おまえが火を吐こうが、竜を殺せる滅竜魔法を使おうが、関係ねえよ！！」

そしてあいつは宣言する。握りしめた右手を俺に向けて

、

「しょせんただの『異能の力』だ！！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

当麻ＳＩＤＥ

「（あっぶねえええ！！何とか消せたか！！今は右手に感謝ですっ！！もし消せなかったら俺は消し炭になってましたーー！）」

けど、これでわかった。これなら戦える。滅竜魔法だろうがなんだろうが右手で消せるなら、俺にも戦える。右手に再び力を込め、ナツに視線を向ける。

「どうしたよ！これで終わりなのか？滅竜魔法ってのは」

「くっ！！・・・・おもしれえ！！燃えてきたぞ！！」

あれ？ここでビビらせて終わらせようかなーとか思ったんだけど

「行くぞ！！燃えカスにしてやるよ！！」

・・・駄目でした。俺の作戦は見事に破綻しました。やっぱり戦わなきゃいけないのかよ！？

ナツがに俺に走ってきている。今度は何が出てきやがるんだ！？

「オラァァ！！火竜の鉄拳！！！」

今度は自分の手に炎を纏ってる！？？何でもアリだな！！

「っく！？」

地面を転がり、なんとかその拳を避ける。すると俺がさっきまでいた場所にナツの拳がぶつかり、地面が砕ける

「（くっそっ！？なんだあのパワー！？だけど、あのパワーは纏っ

ている炎で出しているはず！ならあの炎を消すことができれば！！）
」
すぐに起き上がり初めて攻撃に移る。ナツに向かってただ走る
「うおおおお！」
「もう一度喰らえ！！火竜の咆哮！！」
間近で放たれる炎の渦。だけど恐れる必要はない。スピードを緩めずただ右手をぶつける
「はあああっ！！」
すると、風船が割れたような音と共に炎は四散していく。そしてナツの懐へ入る
「っく！？火竜の鉄拳！！」
しかしナツはすぐに切り返し、俺に向かって拳を放ってくる
だが、俺は放たれた拳を右手で払い除ける。右手に触れた瞬間、纏っていた炎が消え、ナツが動揺した。ならちょうどいい。俺は右手を力強く握る
「んな！？なんでだ！？」
「終わりだ竜殺し！俺の幻想殺しはちっとばっか響くぞ！！」

瞬間、上条の拳がナツの顔面に突き刺さる。そしてナツの体が、地面を勢いよく転がっていった。

はあ、終わった・・・・のか？

俺の右手は魔道士相手には切り札になる。魔道士は魔力で戦う。魔力があるから魔法が使えるし、魔力があれば防御力も上がる。魔道士にとって、魔力は命と同じくらい大事なものだ。だが俺の右手はそれを打ち消すことができる。だから俺の右手で殴られれば魔道士相手には絶大な威力なのだ。体を鍛えていない魔道士ならば、一撃で倒せることができるし、体を鍛えていても相当なダメージを与えることができる。

「そこまでじゃ！！勝者、当麻！！」

そこでマスターから告げられた。ようやく終わったー！！それにしても

「おい、ナツ？大丈夫かー？」

ナツに近寄り、声を掛ける。すると、

「っぅ！？あれ、おれどうなったんだ？」

大丈夫らしい。しかし、会ったばかりの新人を殴り飛ばすって上条さんはいつからこんな野蛮な男に！？

「え～と、ナツさん？思いっきり殴ってすいませんでしたーー！！」
とりあえず土下座に入る。さすがに勝負とはいえあそこまで本気で殴る必要はなかったのでは！？と猛省する俺であった。
「なんでいきなり土下座してるんだよ！？それにしても、くっそー！！次は負けねえぞ！！」
いきなり立ち上がりナツが宣言してきた。
って次があるのかよ！？はあ、不幸だーって、そうだ。
「あとナツ！悪かったな。お前の言ったこと信じなくて」
そこは謝らなくてはいけなかった。ナツが言ったことは本当だったのだから
「ああ、そういえばそうだったな！！気にすんなよ！ニヒヒ！」
笑顔で言ってくる。忘れてたんですか！？そのせいで戦う羽目になったのに！！
「なあナツ、ドラゴンに育てられたんだよな？」
「ああ！イグニールって言うドラゴンにな！」
「じゃあそのイグニールは今どこにいるんだ？俺ドラゴンっていうのに会って見たくてさー！」

俺がそう言うと、今まで笑顔だったナツの顔がいきなり曇りだす。

「あれ！？どうしたんですかナツさん？なんか俺まずいことを言ってしまったんでせう？」

「・・・イグニールは消えちまったんだ。俺に何も言わずにいきなり消えちまったんだ。捨てられてた俺を育ててくれて、魔法や言葉を教えてくれたのに、いきなりっっグス」

・・・・そういうことか。ナツも俺と同じ・・・・

「・・ナツはこれからどうすんだ？そのイグニールってやつを探すのか？」

「グスッああ！必ず見つける！！見つけ出してやる！！」

・・・・強いな、ナツは。その強さに思わず笑みが出る。なら俺にできることは

「なら、俺も一緒に探すよ。イグニールを」

「！！本当か！？本当に一緒に探してくれるのか？？」

ナツが驚いたような顔で見てくる。

簡単な話だった。俺がナツのためにできること。それはナツに協力することだけだ。それでナツの心が少しでも楽になるのならやろうと思った。

たとえそれで、どんな不幸な目に遭おうが知ったことではない。たとえ不幸な目に遭おうが、それが見過ごしていい理由になんて、なるはずがないんだから！

そう。上条当麻は誰かが不幸な目に遭っているというのなら助けようと思う人間だ。それで自分がどんな不幸な目に遭おうが、その人を助けることができるならそれでいい。そう思える人間だ。それは、『不幸』の辛さをだれよりも知っているからだろう。だからこそ、どんなことがあっても、目の前に困っている人がいれば、助けを求めている人がいればどんな目に遭おうが必ず助ける。それが上条当麻にとっての『幸せ』なんだから

「ああ！俺もドラゴンっていうのを見てみたいしな。約束するよ。だから必ず見つけようぜ！そのイグニールって奴を！！」

そう言って、ナツに手を差し出す。

「おう！お前いい奴だな！これからよろしくな！！当麻！」

ナツが俺の手を握ろうとする。その時、

ピシャァァァァァン

突如雷が落ちる。そこには

「フハハハ！！いいねぇ！幻想殺し（イマジンブレイカー）！！滅竜魔道士（ドラゴンスレイヤー）を、ああも簡単に倒すとはよぉ！！テメーのことは前から気になってたけどよ、面白れぇ！！」

そいつは、笑っていた。

子供が新しいおもちゃを見つけた時のような顔で。

獰猛な獣が獲物を見つけた時のような顔で。

そして、その顔は俺に向けられていた。

「俺と戦え！幻想殺し（イマジンブレイカー）！！」

そいつを俺は知っていた。会ったことはないが、聞いたことがある。

マスターの孫で、フェアリーテイル最強候補の一人。その名は

「ラク・・サス！？」

第１０話～幻想殺しＶＳ雷の竜～

当麻　ＳＩＤＥ

「俺と勝負しろ！幻想殺し（イマジンブレイカー）！！」

「ラク・・サス！？」

そこには短髪で金髪、耳にヘッドフォン、そんな風貌をしているラクサスが豪快に笑いながら立っていた。

「勝負！？ふっざけんな！！俺がお前と勝負する理由がねーだろうが！！だいたい、俺はそんなフラグを建てた覚えは皆無なんですけど！？ただでさえ、今日はもうナツと戦ってボロボロなんだよ！そんな上条さんにお前はまだ戦えと！？」

「あぁ！？理由ねえ・・・」

そう言うと、ラクサスは不敵に笑った。なんだ？

「理由ならこれで充分じゃねえか！？」

「な！？待て！！」

ドン！！そんな音と共にラクサスの手から電撃の槍が放たれ、その方向にはナツが！すぐに駆け出す。そしてラクサスの電撃は俺の右手に触れた瞬間光を失う。

「ラクサス！！いきなり何しやがる！？」

「言っただろ？これがお前の戦う理由だぁ！！それにしても、本当に魔法を消しちまうのか！その右手は！！自分で体験してみるまで、信じられなかったが、おもしれえ右手だ！！試してみた価値があったぜ！」

・・・そんなくだらない理由で今の攻撃を放ったってのか！？もし俺が間に合わなかったら、あの電撃は確実にナツに当たっていた！それをわかっててやったってのか！？右手に自然と力が入っていく。

右手を握りしめ、ラクサスを睨みつけていた俺だったが、ラクサスはさらに電撃を仲間たちに放つ。

「！？やめろ！！」

ドンっ！！豪快な音が響く。

しかしその音はラクサスの電撃が仲間に当たったからではなく、ラクサスの電撃が急に方向を変え地面にぶつかった音だった。

「お前がこのまま戦わねーと次は誰かに当たっちまうかもなぁ！！」

その瞬間、上条当麻の中で何かがキレた。おそらく、このまま俺が戦わなければ、ラクサスは本気で仲間に対して魔法をぶつけるだろう。

許せなかった。自分の勝手な都合で、誰かを傷つけようとしているあいつを。

見過ごせなかった。仲間に対して、平気で魔法をぶつけようとした

あいつを。
間違ってると思った。自分の目的のため、関係ない人を巻き込もうとしたあいつを。

震える唇を動かし、右手を力強く握りしめ、宣言する。

「・・・上等だ！！テメェがこんなくだらないことを、二度とできないようにぶっ飛ばしてやる！！」

そして俺とラクサスは、どちらが仕掛けてもおかしくない雰囲気になっていき、お互いが仕掛けようとした瞬間、

「やめんかー！！バカたれ！！」

一人の老人の怒声が耳に届き、お互いの動きが止まる。

「ま、マスター！？どうしたんだよ？」

「おい、ジジィ！！この勝負を邪魔しようってのか！！ああっ！？」

ラクサスがマスターに、今にも殴りかかりそうな勢いで問いかけていた。

「・・・いや、止めはせん！じゃが、周りの奴らが危険じゃからのう。離れたところでやれぃ！！」

「！！」

これは少し驚いた。マスターがあっさり引いた

まあそれなら都合がいいか。俺も、今回は引き下がるつもりはねえんだよ！

「なら来いよ！！森の奥に開いた場所がある！そこでやろうぜ！！幻想殺し（イマジンブレイカー）！」

するとラクサスが光を放ったと思った瞬間

「き、消えた！？」

そこにはすでにラクサスの姿はなかった。それを見て、思わず笑ってしまう。俺はとんでもない奴と戦おうとしてるのかもな

だけど、逃げるわけにはいかない！！ナツや仲間たちに謝ってもらうまで引き下がるつもりはねえんだよ！！

覚悟を決め、森の奥へ行こうとすると

「「「「「「「「「「おい、当麻！！」」」」」」」」」」

呼ばれて振り向くと、そこにはナツやエルザやグレイ、カナなど俺と年の近い奴ら全員がいた。

「ん？どうしたんだ？」

俺がそう聞くと、全員が不安そうな顔をして俯いていたが、何かを吹っ切るように全員が顔を上げ

「「「「「「勝ってこいよ！！当麻！！」」」」」

「！！ああ．．．必ず、ラクサスにみんなの前で謝ってもらうから！！だから、待っててくれ！」

そう言い残し、走る。ラクサスが待つ森の奥へ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

森の奥へ走っていくと、既にそこには戦闘モードのラクサスと、ポツンと座っているマスターの姿がそこにはあった。

「よお！逃げずに来たんだな！褒めてやるよ！！」

ラクサスが俺に話しかけてくる。それには答えず、自分の中に残っている最後の希望にすがる

「．．．一応聞くけどよ、もうみんなに謝るつもりはねえんだな？」

ここで謝ると言えば、言ってくれれば、俺はそれでいいと思った。たとえこいつがみんなを傷つけようとしたとしても、それでもラクサスもフェアリーテイルの仲間だ。できることなら戦いたくない。

だがそんな希望（げんそう）は簡単に砕け散る

「ップ！！クハハハハ！！おもしれえ！！それはお前なりのギャグかよ！？おい！！俺がだれに謝んだ？正義のヒーロー気取りか！？クハハハ！！」

・・・ならもう語る必要はないってわけか。思い切りぶん殴った後で語るだけだ。

「行くぞ！！ラクサスッ！！」

そんな声とともに、ラクサスへ一気に駆け出す。

「うおおおおおおおおおおお！！」

「八ッ！一直線に突っ切ることしかできねえのか！？オイ！！」

そしてラクサスの懐へ入る。そして思いきり右手を放つ！！しかし

ヒュンッ！

その右手はラクサスには当たらず、空をさく。

「っな！？」

ラクサスは消えていた。比喩などではなく本当に消えていた。

「（やっぱり速い！？これじゃあ右手でとらえられねえ！！）」

どんな凄い武器を持っていようが当たらなければ意味はない。
たとえ魔道士相手には切り札になる右手を持っていようが。

「（ラクサスはどこに！？ッ！！）」

俺は急に感じた悪寒を頼りに姿勢を低くする。するとさっきまで俺の頭があった場所にラクサスの電撃を纏った拳が通過していた。そんな俺にラクサスは少し驚いた表情を見せたが、即座に攻撃に移ってくる。その攻撃に強引に体を動かし、思い切り横に跳ぶことでかわす。

しかし、ラクサスはそれすら逃がさない。俺が飛んだ方向に即座に雷撃を放つ。

「（くっ！攻撃スピードが速すぎる！？これじゃ右手一本じゃ追いつかねえ！？）うおおおおっっ！！」

横に跳んだ体を強引に捻り、電撃を避ける。体を強引に捻ったため、体のあちこちから嫌な音がしたが、気にしてる場合ではない。

だが、ラクサスの攻撃は終わってはいなかった。俺が避けた電撃が地面とぶつかり、ぶつかった衝撃で地面が鋭い破片となり俺に襲いかかる。

「ぐ・・ああああああああ！！」

体がそのまま後ろへ持って行かれる。体の痛みが頭の中を支配しそうになるが、止まってはいられない。

「はあはあ！？っく！！」

倒れている体を動かし、飛んでくる電撃を何とかかわす。

「ははは！思った以上にいい動きするじゃねえか！！オイ！！」

ラクサスが俺の前に回り込んでいた。

「（こいつ、俺がかわすことを読んで！？）」

わかった時には遅く、すでにラクサスの拳が俺の腹を捉えていた。

「ごォあああああああああ！！？」

そのまま何mも飛ばされ、何度も転がりようやく動きが止まる。

「（っく！？こいつ、マジで強い！！しかも、魔法でゴリ押ししているわけじゃなくて、しっかりと考えて攻撃してきやがる！？これじゃあ右手があってもあいつの攻撃には間に合わねえ！！）」

何とか起き上がるが、それだけの動きで体中が痛む。

「おいおい！！どうしたよ、こんなもんか上条！！俺をブッ飛ばすんじゃなかったのかよ？」

っく、そんなことはわかってる。

しかし、ラクサスの攻撃は速く、とても重いものだった。いろいろな不幸を体験し、ギルダーツと修行をして体が鍛えられている俺でも、あの攻撃を何度も喰らったら、確実にやられる！！

「ハハハ！！テメーの力があろうが、俺の電撃は捉えられねえ！！これがフェアリーテイル最強の魔道士だ！！」

・・・最強か・・・

「・・・・はは、ははははっ！」

こんな状況にも関わらず、思わず笑ってしまう。ラクサスはそんな俺に怪訝な表情をしていた

「・・・確かにな、お前の力はすげーよ。正直ここまで強いなんて思わなかったしな。

だけどな、

お前は最強なんかじゃねえよ！たとえどれだけ強くたって、どれだけ魔力が高かろうが、その力を仲間に向けちまうような奴が最強なはずがねえだろうが！！」

そうだ。確かにラクサスは強い。おそらく今俺が見た力も本気ではないのだろう。

だけど、こんな奴が最強なはずがない。俺は知っている。

ギルダーツと言う男がいる。その男は本当に強く、魔力も桁違いだ。

だが、絶対にその力を自分勝手な理由で仲間には向けない。ギルダーツだけじゃない。フェアリーテイルの魔道士は絶対にそんなことはしないだろう。

「テメェは最強なんかじゃねえよ！テメェがそんなくだらない思いを変えることができなきゃ、テメェはいつまでも最弱なんだよ！！」

その瞬間、ラクサスの体から電撃がほとばしる。

「最弱だと！？この俺が最弱だぁ！？笑わせんなよ！！くそガキが！！」

ラクサスの体から電撃が四方八方へ飛んでいく。飛んでくる電撃をかわせるものはかわし、かわせないものを右手で消していく。なんだ！？

「はぁはぁっ！おもしれえ！！そこまで言うなら、この俺を倒してみろ！！上条ー！！」

くっ！そんなラクサスを見て身構える。だがラクサスはそんな俺を見て

「くはははは！！構えてどうすんだ？教えてやるよ！！今から放つ攻撃はテメェじゃ防げねえ！！」

「（なんだ？何を仕掛けてくる！？）」

そう思って警戒していると、周囲が光りだしていく。

「なんだ、これ？」

俺の周囲がまるで、蛍が大量にいるかのように光りだしていく。
「テメーの右手に触れた魔法は打ち消されていく。ならよぉ、右手じゃ間にあわないような攻撃をしたら終わりだよな？」
「っ！！ヤバイ！！」
すぐさまここから離れようとするが、ラクサスが笑ったその瞬間
周囲の一個一個の光から電撃が周囲に拡散していく。そんな大量の電撃を右手一本で打ち消せるはずがない。
「っっっっ！！！！」
悲鳴をあげることすら許されない。永遠に思える痛みが襲いかかる。

そう。今まで俺がいろんな魔道士たちに勝ってこれたのは、単純な話、ただ相手が俺の右手を知らなかったからにすぎない。相手の魔法を消し、驚いている間に勝負を決める。それが俺の勝つ方法だった。しかし、ラクサスにそれは通用しない。あいつは戦う前から俺の右手を知っていた。おそらく対策を練っていたのだろう。
どんな凄いパンチだろうが、あいつはとてつもない速さでそれを回避してくる。
どんな魔法も消すことができても、右手にしか効果が無いのなら、量で攻められれば対処することはできない。

つまり、そういうことだった。

光が弱まっていく

「っがはぁ！！」

そのまま前に倒れこんでしまう。意識が薄れていくのがわかる。

「（・・ちく・・・しょう！！何を・・・やってんだ俺は！みんな・・と約束しただろ！

勝って来ると！！みんなの前で謝らせると！！

それが何でこんなところで寝てるんだ！立ち上がれよ！上条当麻！！）」

自分を奮えたたせるが、体は動いてくれない。

「ハッ！！つまらねえな！もうおしまいかよ？あれだけ大口叩いてこの様か！！」

・・・・そう・・だ！あれだけ言っておいて、このまま終われるかよ！！絶対あきらめてたまるかよ！！

動けなくなった体に力を入れる。

歯を食いしばる。体中から悲鳴があがるが、そのすべてを無視し、力を入れ立ち上がる。

仲間との約束を守るために！！

「あ、ぁぁあああああアアアア！！」

立ち上がった俺を見て、ラクサスは驚いていたが

「！！っへえ！まだやる気なのか？そんな体で俺に勝てるとでも思ってんのか？」

答えている余裕なんてなかった。もうすでに体は限界に近い。それでも前に進む。力を振り絞り、ラクサスの元へ

「まだ向かってくるってのか！！だったら、これで終わりにしてやらぁ！！」

ラクサスは俺に手を向けてくる。その手から大量の電撃の球体を出し、そのすべてが俺へ飛んでくる。そして、そのすべてが着弾し、粉塵が巻き起こる。

「（これで終わったろ。右手を使おうが防ぎきれる量じゃなかったからな。所詮、魔法を使えないあいつなんてこんなもんか）」

そう思い、ラクサスは目を離した。しかし、

「っぉぉおおおおおおあああああああ！！！」

粉塵を突き破り、ただ前へ駆ける。あいつの元へ。

「（ありえねえ！？今の攻撃を喰らって、どうやったら立ち上がれるんだ！？）」

ラクサスの懐へ入る。逃げる暇すら与えない。拳を岩のように固く握りしめ今の自分に出せる最大の一撃を放つ。ラクサスも電撃を纏った拳を放ってくる。

二人の拳が交差する。

ドゴンッ！！！凄まじい音が炸裂した。

一人が後ろへ飛ばされ、地面を転がっていく。

そしてもう一人は倒れない。体中が焼かれていても、電撃の拳を喰らっても、それでも倒れない。

「（・・・・・はぁ・・・終わった・・・のか？）」

ラクサスの方を見ると、地面に倒れている。その体はピクリとも動かなかった。

「（何とか・・・勝てた・・）」

約束を守ることができた。そう思うと、意識が飛びそうになる。

だが

「・・・いいねえ！！まさか、あれだけのダメージを喰らってこん

なパンチを撃ち込んでくるとはよぉ！！気に入ったぜ！！上条！！」
絶望の声が聞こえた。後ろを向くと、ラクサスが立ち上がっていた。ダメージはあったのか、少しふらついているように見える。だが、そんな中でもラクサスは笑っていた。
「（ぐっ！？今の拳を喰らって立ち上がってくるのか！？もうこっちは腕を上げることすらできねえぞ！！）」
もともと、限界に近い体を無理に動かし、何とかしていたのだ。それが限界に到達した
「このままぶったおしちまうのも楽だがよぉ、テメエが俺にいいパンチをくれたからよぉ！特別に見せてやるよ！！」
「（なんだ？まだ何かあるっていうのか！？ちっくしょう！！）」
ふらつく体を何とか支え、停止しようとしている頭を、脳を何とか動かし、意識をラクサスへ向ける。
すると、ラクサスに、そして周りに変化が起こり始めていた。
「（！なんだ！？これ！？大気が震えてる！？それだけじゃない！ラクサスの魔力がどんどん上がってるのか！？それに、あれは！！）」
ラクサスの歯が、とがっていく。その歯がとがった姿を俺は別の場所で見たことがあった。あれは、
「ナツと一緒！？なんで！？ッッ！！まさか！？」

「行くぞ！！雷竜の・・・・・・

ありえない！その動きはまさしくナツと同じだった。つまりあいつも

「おまえも滅竜魔道士（ドラゴンスレイヤー）なのか！！？ラクサス！！」

咆哮！！！」

驚いて気が動転している俺の問いにラクサスは答えず、ナツとは比べ物にならない咆哮が俺を包み込んでいく。そんな攻撃に、俺は右手を動かすこともできず、ただ呆然と立ち尽くすことしかできず、俺は自然と目を閉じていた。

・・・・・・・・・・・・

しかし

いつまで待っても俺に衝撃は来なかった。正直、あの一撃を喰らったら俺は死んでしまったかもしれない。それほどの威力だったのは見ただけでわかるほどだった。しかし、なぜ俺に何も痛みが来ないんだ？

「（死ぬ時って痛くないものなのか？いや、一瞬も痛みを感じないっていうのは無いだろ！じゃあ何が！？）」

不審に思い、目を開く。

すると、

「何の真似だよ！？ジジィー！！」

俺を守るようにマスターが仁王立ちしていた。

「・・・・何の真似か、じゃと？それはワシのセリフじゃ！！ラクサスーー！！」

いつもは見せない表情でラクサスに言葉をぶつけていた、

「その力を使ってはならんとあれほど言ってあったじゃろうが！！それに、今の咆哮、仲間に向けて撃つにはデカすぎるじゃろうが！！当麻を殺す気か？ラクサス！！この勝負はここまでじゃっ！！」

「っ！？ふざけんじゃねぇぞ！！ジジィ！まだ勝負は「終わりじゃ！ラクサス！！」っぐ！！」

二人は少しの間睨み合い、

「っち！」

ラクサスが後ろを向き、歩いていく。だが数歩歩いたところで立ち止まり

「おい、上条！今回は命拾いしたなぁ！！だが、次オマエと戦うことがあれば、その時は本気でオマエをつぶす！！」

そう言い終え、気づくとラクサスは消えていた。

少しの静寂の時が流れ

「ふぅぅ～お疲れさんじゃ当麻！！怪我はってオイ！？当麻！？」

マスターが何か言っているのはわかったが、そこで俺の意識は途切れる。

こうして、幻想殺しとフェアリーテイル最強候補との戦いは終わった。

しかし、この二人はまだ知らない

遠くない未来

二人が再び拳を交えることを

第１１話～少女の優しさ～

当麻ＳＩＤＥ

上条当麻は朝日のまぶしさと、のどの渇きで目が覚めた。

「（・・・・・・・・・・・・・あれ？俺いったい何してんだ？・・・この匂い

・・・・・はぁ～またここに来ちまったのか。いつもの病室か、匂いでわかっちまうのっていやだな～ここに来るの何度目だよ？・・・いや数えるのはやめよう・・この先ずっとここへ通うようなそんな不幸予想図が視えた気がする・・）」

ぼんやりとしている頭を動かしながら、体を起こそうとすると何か体に少しの重みを感じた。疑問に思い、目を向けると

「スゥスゥ」

可愛らしい寝息を立てて、エルザが俺にもたれかかって寝ていた。

「・・・・あれ！？なんで！？なんでエルザさんがこんな所に？」

これはおかしい。俺が倒れることなんていつものことなので、既にギルドの連中は誰も俺のお見舞いになんて来る事はないのだ。

なのになぜ、エルザがここで寝てるんだ！？寝起きということもあり考えがまとまらず、頭の中がめちゃくちゃになっていると

「おぉ・・ようやく起きたか。体は大丈夫かのぅ？」

不意に後ろから声を掛けられる。

「誰だっ？って、マスター！？あんたもここにいたのか？」

声の主は、とても眠たそうな顔をしているマスターだった。

「その様子なら、少しは元気になったようじゃのぅ。心配したぞい」

「心配って、ここに来るなんて俺にとっては日常茶飯事だろ？それが何で今回はエルザやマスターがいるんだ？」

するとマスターは呆れたような表情で

「・・・はぁ。お前さん、自分がどんな状況だったかも知らんじゃろ？面倒くさいから一気に伝えてやるわい。

まず、お前さんはラクサスにボコボコにやられた傷がひどくてのぅ、治そうとポーリュシカを呼んだら右手ですべて打ち消してしまうし、それで自然に治るのを待つしかなくてのぅ、お前さんは三日も寝とったんじゃ。

その間、エルザがずっとお前さんの看病をしとったんじゃ。みんなでやろうといったんじゃが、エルザが「私がやる！！」と言って聞

かなくてのぅ。仕方ないからエルザにやってもらったというわけじゃ」

・・・・・・・・・・・・へぇ～三日か。よく寝てたんだな～

「って三日！？俺そんなに寝てたのか！？」

いつもボロボロにされてたから回復力だけには自信があったんだけどな～それほどダメージを喰らったってわけか。まあ死ぬほど電撃を喰らったような～いや、思い出すのはやめよう。それだけで、体中が痛くなってくる気がする

それにしても

「・・なんでエルザはたった一人で看病してくれたんだ？」

「ボロボロのお前さんをギルドに連れて帰ると、エルザが血相変えて一番に出てきてのぅ。傷ついているお前さんを見て、それはもう驚いておったわい。少しの間パニック状態になっておったが、すぐに冷静さを取り戻したと思ったら「私が当麻の看病をする！！」と言い出したんじゃ。なんでかはワシも知らん。本人に後で聞いてみたらどうじゃ？」

・・・・そうか。心配かけちまったみたいだな。寝ているエルザの頭を優しく撫でていると

「スゥスゥ・・・・んん？なんだ？・・・ッ！！」

「・・・・目が覚めましたか？エルザさん」

なるべく優しい声で話し掛けたつもりだったのだが

「・・・！！当麻っ！！！」

喜んでいるのか、泣いているのかわからないような表情で抱き付いてくる。普段の俺なら、ドキドキするのだろうが体中を焼かれた今の俺にとっては

「っっ！！？ギャアーーー！！」

「当麻！当麻！体は大丈夫なのか！？寝てなくて大丈夫なのか？」

「ダイジョウブー大丈夫ですよエルザさん！上条さんは今ここに完全復活を遂げました！！ですから離れて下さいー！！また上条さんの体が壊れてしまいますよ！！って聞こえてますかー！？結局こういうオチかよ！！一週間ぶりに言っちゃいますよ！！はい、みなさんご一緒に～

不幸だーーーーーーーー！！！」

それからエルザは落ち着くまでずっと俺を離してくれず、その間俺の絶叫が部屋に響いていたのは言うまでもない。

「うぅ～全身が痛ぇーいくらなんでも、いきなり強く抱きしめるなんてどうなんでせう？エルザさん」

「う、うるさい／／／当麻が悪いんだぞ！！三日も倒れて、もっと鍛錬が必要だ！！」

「え～なんなんですか？その理不尽な怒りは・・・そりゃ～三日は倒れすぎだと思うけど、見ての通りラクサスに今までに無いほどにボコボコにされたんだからしょうがないだろ！？」

理不尽なことを言われ、少し強い口調で言うとエルザは俺の体を見ながら

「うるさい！わたしがどれほど・・心配・・・ぐ、ヒック・・・・うぇ～ん」

「！！ってエルザさん！なんでいきなり泣いてしまうんでせう？」

「・・・当麻が寝てる間・・私がどれほど心配したか・・」

そう言えばエルザは俺のことをずっと看ててくれたんだっけ。つまり悪いのは俺ってことかー！

「え～と、すいませんでしたー！！今回の件は全てこの未熟者上条当麻が悪いです！なんでも致しますゆえ、どうか泣き止んでくれませんか姫！」

いつも強気なエルザが無く所なんて見慣れない光景だ。謝らなくてはと思うが、あのエルザが瞳を潤している所なんてめったに見れないわけで、こんな状況ながら少しばかりドギマギしてしまう。そんな俺にエルザは決定打を放つ

「ぐす．．．なんでも．．．するの？」

はい涙目上目づかい来ましたーこのコンボを耐えきることなんて上条さんにできるはずもなく

「／／／はい！！わたくし上条当麻めに何なりとお申し付けください姫！！」

思わずそんなことが口から出てきてしまった。はっ！と自分の言ったことに気づき恐る恐るエルザの方を見ると

「．．．．そうか。なんでも．．．か。フフフ」

「（なんだか知らないが、とてもいや～な笑みを浮かべてるよ！なんだ！？何をさせられるんだ～！！なんだか不幸な予感がする！！）」

二人が全く別の意味でドキドキしていると

「・・・おまえさんら。なんなんじゃ？できたてほやほやカップルみたいな空気を作りおって！！」

空気になりかけていたマスターが割り込んでくる

「か、かかかカップル！！／／／／」

エルザがこれでもかと言わんばかりに顔を赤くした。どうしたんだ？

「ははは～何をおっしゃいますやらマカロフさん！不幸の塊であるこの上条さんにそんな展開はありませんのことよ～って！なんで静かに拳を振りかざしてるんだよ！エルザ！？」

「・・・・・・・・・・・・フン」

なぜかそっぽを向かれてしまう。

「（なんで怒ってるんだ？）」

エルザのよくわからない行動に首を傾げていると

「・・・・当麻は相変わらずじゃのぅ。そうじゃエルザ。当麻が起きたことをみんなに知らせてきてくれぃ」

「・・・・・・・はい」

小声で言い、ドアの方へ向かって行った。しかし歩を止め、振り返らず

「・・当麻。何でもするという約束・・・・必ずやってもらうぞ。返事は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・はぃ」

エルザの無言のプレッシャーに負け、そう言うことしかできなかった情けない俺なのであった

エルザが部屋を出ていき、必然的に二人きりになった俺とマスターだったが、特に話すこともなく少し静かな時が流れた。

・・・・・・・・・・

「・・・それにしても今回は無茶したのぅ。本当に死んでもおかしくないケガじゃったんじゃぞ」

喋ったのはマスターだった。少し怒った口調で俺に言ってくる。

「いくら特別な右手を持っているといっても、それ以外は魔力を持たない普通な人間なんじゃぞ。もしワシが止めなかったら本当に死んでたかもしれん。なぜあんなになるまで戦ったんじゃ？」

マスターに問いかけられ、自分の右手を見つめながら

「・・・そうだな。確かに俺は右手以外は普通の人間だ。魔力なんて大それたものも持ってない。だけどさ、関係ねーよ。力があったって無くたって俺にはそんなものは関係ないんだよ」

右手を強く握りしめる

「あの時俺は仲間を傷つけようとしたラクサスを許せなかった。だから戦った。・・・結局俺が戦う理由なんてそんなものなんだよ。誰かが苦しむとか、傷つくとか、そんなくだらないものを見たくねーから戦うんだ。例え俺に能力が無かったとしても、きっと戦ったと思う。変わらないんだ。能力があろうがなかろうが、そんなものじゃ俺は揺るがない。上条当麻っていう存在はそんな程度じゃ揺るがないんだよ」

上条当麻の戦う理由なんてこれ以上ないくらい単純で、笑ってしまうものなのかもしれない。

しかし、だからこそ上条当麻は走り続けることができる。

「だから、ラクサスがまたあんなくだらないことをやったり、誰かが傷つこうとしてるって言うなら俺はまた戦うぞ。そこで見過ごしていい理由なんてどこにもないんだから」

俺が自分の中にある思いを告げると

「ようやく起きたのか！！よ～し、今度はぜってぇ負けねえぞ！！燃えてきたー！！」

「どーせまた負けんだろ。この単細胞！！」

「ああ？やんのか！！パンツ将軍！！」

「やめないか！！二人とも！！」

外が少し騒がしくなってきた。エルザがみんなを連れてきたのだろう。マスターは少し思いつめた顔をしていたが

「・・じゃあ当麻はこれからも仲間のために戦うのか？」

そんな質問を投げかけてくる。俺は少し考えながら

「・・・いいや」

そしてドアが開く。そこには大切な人たちがいる。守ろうと思える人たちが

「自分のためだろ」

それこそが上条当麻にとっての『幸せ』なのだから

第１２話～修羅場？？～

当麻ＳＩＤＥ

はぁ～どうしてこうなったんだろう？

「私が先に当麻と約束したんだ！！」

「うるさい！！こいつに用事があんのは私なんだよ！！」

二人の少女が俺を巡って口論している。それだけを聞けば、俺はとてもうらやましいポジションにいるのだろうが残念ながらそんなおいしい展開など上条さんに訪れるはずもない。俺は不幸なのだから

そして大事な事なのでもう一回だけ言おう

「どうしてこうなったーーー！！？？」

それを説明するためには少し時を遡らなければならない

～回想～

「当麻！！いい加減約束を守ったらどうだ？」

「だぁーー！何度も言ってるじゃねえか！！あれはもう一回やっただろ！！なんであれがノーカンになってんだよ！？？」

わたくし上条当麻は現在エルザと激論中である。内容は『俺が何でもするという約束』についてだった。だがそれについてはもう

「あの約束はおまえが『わ、私と一緒に出掛けてもらうぞ／／／』で終わったじゃねえか！！なんでまたやらねばならないんでせう！？」

エルザとの約束は買い物に付き合うというものだった。その日の俺は、いつも鎧を着ているエルザが可愛らしいワンピース姿で登場したため不覚にもときめいてしまったり、エルザはエルザで終始顔を真っ赤にしていて俺が話しかけると「っひゃい！！」などと可愛らしい声をあげるなど俺達にとって少し刺激が強い買い物になった。しかしそんな空気は一瞬にして変わることになる

「何を言っている！！あの時当麻と出かけたらいきなりテロリストと出くわしてそれどころじゃなかっただろ！！」

俺たちが店に入ると既に来店中のテロリストさんたちが待ち受けていました！テヘッ

しかしそのテロリストはごごごごっっ！！と効果音が聞こえそうな程の迫力を見せたエルザさんにより簡単に倒された。途中「どうしてこの日に出てくるんだ！！！せっかくのチャンスを！！！」などと聞こえた気がするがどういう意味だろうか？？そんなに俺をこき使いたかったのか？？

結局その日はそのまま終わり、何とも締まらない形で約束は終わったのであった。

「ぐっっ！だけどそれはそれだろ！約束は守ったんだからあの話は終わり！！誰が何と言っても終わりなんですぅ！」

俺が無理やり話を終わらせようとするが、エルザは後ろでぎゃーぎゃー言っている。エルザはここ最近ずっとこんな感じだ

それに俺が抱えている問題はこれだけじゃないのである。それは

「こらー！当麻！俺と勝負しろー！！」

この戦闘マニアである。ナツは毎日のように勝負を挑んでくる。俺に一度負けたことが相当ショックだったらしい

「だぁぁぁーーーーー！！どうしてお前はこう忙しいときにやることを増やすんだよ！？何度も言ってんじゃねぇかぁ！！俺は戦わねぇって！」

ああもう！毎日毎日なんなんですか！！

自分の不幸っぷりに肩を落としていると

「・・・・なんで二人とも魔法を使おうとしてるんだよ！？？ああもうやっぱり不幸だーー！！」

逃げるためにドアの方へ勢いよく走る。すると

ドンッ！！とドアが吹っ飛んでいった。そこには

「ここがフェアリーテイルか？」

綺麗な長い銀色の髪を後ろで束ね、服は隠すところは隠していたが、まあ何とも動きやすい服なんだろうなーと思える服、そして少し怖い印象を受けるがそれも含めて可愛いと思えるような顔立ちをしていた。そんな少女が勢いよくドアを蹴破っていた。

ってそんな場合じゃない！！まずい今更止まらねえー！！

二人からダッシュで逃げようとしていた為、不測の事態に対処できるはずも無く

「ぎゃぁぁぁぁー！！どいてくれーー！！」

「あぁ？ッッなんだ！？？」

ドンッ！！当然止まれるはずも無くいきなり現れた少女を巻き込んで倒れてしまう。

「おわっ！？」

「っきゃぁ！！」

「っいてぇーごめん！大丈夫だったか？」

体を起こそうと、床に手を置こうとする

フニュ

「（フニュ？）」

返ってきたのは、硬く冷たい感触などでは無く温かく柔らかい感触だった。なんだろう？そう思い、目線を自分の手に送ると

「・・・・・・・・・・・・」

少女の平べったい胸に手を置いていた。早く退ければいいのだろうが、人間本当に驚くと簡単には動けないものなんだよ！！と俺が誰に言い訳してるかわからないパニック状態になっていると

「・・・・う～ん？いったいｎ・・・！！」

少女が起きて今の状況を把握したらしい。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

お互い何もしゃべれずギルド内に沈黙が続く。それを破ったのは他でもない少女だった。

「・・・・・・・し」

「し？」

「死ねーーー！！！この変態野郎！！／／／」

「うごばぁぁー！！」

何とも言えない叫び声をあげながら吹っ飛ぶ俺だった。・・・まあ、あの状況から抜け出せたんだ。これくらいで済むのなら軽いものだろう。・・・だけどちっとも嬉しくないのはなぜだろう??

「・・・・・・・・・・と～う～ま！！死ぬ覚悟はできたか？」

声がした方へ振り向くと後ろに闇魔大王でも見えてきそうな威圧感を放っているエルザがいた。

「え～とですねエルザさん？一応弁解させていただくとですね。あれは不慮の事故であって決して狙ったとかそんなんじゃありませんよ～だからその剣をしまって平和的解決の道を考えるのはいかがでしょうか？」

最後の悪あがきをしていると、さっきの少女とエルザが俺の前に立ち

「「覚悟はいいか！！」」

二人が最後の通達を渡してくる。

「あの～少しでもいいので俺の話を聞いていただけないでしょうか？あ、無理ですか無理ですよねごめんなさいーー！！」

俺の謝罪も空しく、最後にはボロボロな姿で無残に倒れていた姿がそこにはあった

起き上がるとそこは地獄・・

ＢＡＤ　ＥＮＤ

ではなく、床に放置されたままだった。後でグレイに聞いてみたら、あの二人が怖すぎて近づけなかったとのこと。あの時の二人を見れば誰でも同じ行動をとるだろうから仕方がないだろう。はぁ～不幸だーそれにしてもみんなどこに行ったんだ？

ギルドの中には誰もおらず、俺一人ポツンとギルドに取り残された状況になっている。

「いったいこれはなんなんでせう？これが世間一般に言われる放置プレイ？」

シーーーーーーーーーン

うう！ボケても反応が無いとつらい！！じゃなくてみんなどこに行ったんだ？足に力を入れ立ち上がり、外に出ようとすると

「「「「「「「うおおぉぉーーーーーー」」」」」」」

なんだ？外が騒がしい。

「（あれ？この展開どこかで見たような？）」

デジャブのような感覚にとらわれながら外に出てみると

「はっ！よわっちぃ奴だなぁ！オイ！！」

「ガハッ！くっそー！つえーー！」

ボロボロな状態で倒れているナツと、悪魔のごとき姿で立っている女？が立っていた。訳が分からず近くにいたグレイに話しかける

「あの～グレイさん？これはどういう状況なんでせう？？？」

「ああ起きたのか当麻。いつものことだよ。新人が入ってきたから闘うことになったんだよ。いつも闘ってた当麻が気絶してたからナツがやるってことになったんだよ。それでやってみたらナツがボコボコ！ハハハ！ざまぁねえなナツ！！」

グレイがナツがやられたのが嬉しいらしく高らかに笑っていた。ん？新人ってまさか・・・・

「・・・・・・グレイさん・・・まさか新人って？」

「ああ。お前が押し倒したあの女だよ！ああ見えてめちゃくちゃ強いぜあいつ」

「（ぎゃーーー！まじかよ。あの女の子フェアリーテイルに入るのかよーー！いきなり気まずい空気になっちまったーーー！！しかも強いってまたボコボコにされるのかーー！？？やっぱり不幸だー！！）」

そんな悲しい現実に打ちのめされ、うなだれていると

「大丈夫～？さっきの怪我は？」

「・・・・・・」

知らない少女と少年がそこにいた。

「え～と、誰でせう？？？」

俺が率直な疑問を投げかけると少女は笑いながら

「自己紹介がまだだったね。私リサーナ！！よろしくね！！後こっちがエルフ兄ちゃん！！二人ともミラ姉と一緒にフェアリーテイルに入ったんだよ！！」

優しい笑顔で手を差し出してくる。

「（・・・・・・・なんて、なんていい子なんだーーー！！ついに来ましたよー！普通で優しい女の子が来ましたー！！上条さんは待ち望んでましたよはい！！うぅ～この優しさが身に沁みますよ。涙が勝手に出てきますー！！）」

俺が心の中で歓喜し震えているとリサーナが首を傾げていた。俺も手を差し出し、リサーナの手を握ろうとする。

が、

ピュン！！何かが俺の顔をかすめた・・・・飛んできた方向を見ると

「・・・今度はリサーナに手を出そうってのか？いい度胸だな変態野郎！！」

・・・・悪魔が不気味に笑っていた。見ただけで体が震えるようなそんな笑いを

「ちょっとミラ姉！！いきなり危ないよ！！」

リサーナがかばってくれる。なんていい子なんだーー！！あなた様が天使に見えますのことよ～！！

しかし

「リサーナは黙ってろ！！それよりちょうど暴れ足りなかったところだ。私と闘えよ！！変態野郎」

悪魔は当然許してくれませんでしたーですよねー！！はぁ～状況から考えて逃げられないだろうなー

「・・・・・・わかったよ。その勝負受けますよ・・」

「いい度胸だな！！なら始めるぞ！！」

言うと同時に魔力弾を放ってくる。あーそう言えばこいつ俺の能力知らなかったっけ。

「はぁ～邪魔だ！！」

右手を軽く振るうと弾は簡単に消えていった。

「っな！？」

俺の能力を知らないミラネエ？（名前知らない）は驚いているようだ。とっとと終わらせますか

そう思うのと同時に駆け出す。

「（あの悪魔みたいな状態で闘うのがアイツの魔法ってわけだ。な

ら右手で触れれば！！）」

しかしこの考えが上条当麻にとって更なる地獄を見ることになるなんて知る由もない。

「くっ！！？？」

動揺しているのか、魔力弾を乱発してくる

軽やかにステップを踏みながら避けていく。避けられないものを右手で消していく。そして

「もらったぁぁーー！！」

至近距離まで近づき右手を振り上げる。アイツは殴られると思っているのか両手をクロスさせてガードしようとしていた。ふ、甘い！！

トン！！

殴るわけでもなくただ右手をアイツの体に置いた。

パキィィン！

思った通り右手が反応した。これで闘いが終わる！！わたくし上条さんはそう思ってました！はい

しかし、上条当麻の右手はそんな幻想をも殺してしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・あれ？？？」

右手で触れると、魔法は解けて普通の少女に戻っていた。そこまではよかった。

・・・・・・・・・・・・・だがなぜ

なぜこの少女は服を着ていないんでせうかーーー！？

「？？・・・・・・／／／／／／」

少女は自分の状態に気付き、座り込み自分の体を手で隠そうとしている。しかしその隠す姿がとても扇情的に見えてしまう。

「なんでだーーーー！！？？エルザと同じような魔法だったのか！？？これだから魔法ってのは！とにかくすみませんでしたーーーー！！」

頭を掻き毟りながら即座に土下座に入る。女の子を裸にしたなんてどういう状況だったにしろ俺が悪いに決まってるのですー！とにかくこのままではまずいので土下座したまま

「・・・・あの～姫？とりあえずわたくしの上着を着ていただけませんでしょうか？？制裁は覚悟の上ですのでどうかお願いします」

おずおず上着を少女に渡す。すると少女はすごい速さで奪い取り即座に羽織る。するとふるふると震えだした。

「え～と姫？なぜいきなり震えだすんでせう？？」

恐る恐る聞くと少女は涙で潤んでいる瞳で俺を睨んできた。しかしこんな状況なので怖くもなんともなく、ただその瞳にドギマギしてしまうだけだった。

「・・・・・一度ならず二度までも・・・・こうなったら・・・」

？小声で何か言ったような気がしたが聞き取れなかった。なんだ？？

「おい・・・お前名前は？」

「はい・・上条当麻です。あなた様は？」

この状況で俺たちは何をやってるんだろう？？なぜいきなり自己紹介？？

「・・・上条当麻か。私はミラジェーン。ミラでいい。当麻！」

「は、はいぃ！！」

急に名前で呼ばれ思わず返事をしてしまった。

「せ・・せき・・・／／／」

「せせき??どうしたんだおまえ??」

「責任とってもらうぞ!!／／／／／」

「・・・・・・・・・・・・・・はい???」

セキニン?セキニンっていうのはあの責任!?オンナノコからその言葉を聞くと何やら不穏な動響きがあるのですが～!?

「あの～責任とはどのような??」

「きき決まってるだろ／／私を押し倒して、むむ胸を触った挙句に裸にまでしたんだ／／お、お前は私の嫁にする／／／」

ここはどこぞのI○学園かーーー!?いやそんなことよりこれはやばいぃ!!この状況あいつが許すはずも無い。

ハッ!!後ろから猛烈な殺気がひしひしと伝わってくる

「・・・・・・・・・おい当麻・・・ずいぶんお楽しみだな・・」

後ろには覇王と化したエルザ様が仁王立ちしていましたとさ。

「・・・ハハ何を言っても無駄だと思いますが最後に言わせてください・・・ハイみんなで一緒に～

不幸だーーー！！」

エルザの拳が俺に突き刺さろうとした瞬間ぐいっ！と何かに引っ張られる。なんだ??

「おい、テメー！当麻に何しようとしてんだ！」

「そこをどけ！！私は当麻に用があるんだ！！」

ぎゃーぎゃー

いつの間にか俺の味方?になってくれたミラと覇王エルザが口論しだした。

・・・・・何このカオス??

～回想ＯＵＴ～

そして今に至るというわけだ。二人の口論はすでに実力行使となっていた。魔法こそ使ってはいなかったがじゃれあいなんてレベルで

はないどつきあいにまで発展していた。ギルドのみんなは既に飽きてしまい全員ギルドに戻ってしまった。俺も戻ろうとしたのだが

「「当麻はここにいろ！！！」」

と二人に恐るべき力で肩を掴まれたので逃げるに逃げられず一人で少女二人のどつきあいを見学しているというわけだ。

すでに日は沈みかけているが二人は一向にやめる気配がない。

「（はぁ～どうしよう？？）」

「くっ！これでは埒が明かない！なら当麻に決めてもらおう！！」

「はぁはぁ、それがいいな！そうしよう！！」

争っていたミラとエルザが急に話を振ってくる。なんでここで？？？

「「・・・・・・・」」

無言で二人が睨んでくる。

「・・・・・・・・・・・・ え～とじゃあいっその事両方選んでハーレムＥＮＤというのは？」

ブチン！！

「あれ??今何かおかしな音が聞こえましたよお二人さん??いや違いますよ冗談ですのよ。冗談ジョウダーッ!!ギャーーー!!!いつもエルザ一人だったのに今回はミラもいて二倍増しー!?」

「当麻はどこまで行ってもやはり当麻か!!」

「ふざけんなコノヤローー!!」

「待って待ってくださぎゃあーー」

太陽が沈んだ時ワタクシ上条当麻の断末魔の叫びが辺りに響いたとさ

おしまい!!

「おしまいじゃねえーーーぎゃあーーーー!!!!」

キャラ設定（前書き）

どうもです。今回あの禁書キャラを当麻の猫にしました。
そういうのが嫌と言う方はお戻りください

更新することがあれば随時更新していこうと思ってます。
では投稿です。

キャラ設定

上条当麻（かみじょうとうま）

・身長１７０ｃｍ
・年齢１８歳

・好きなもの　平凡な幸せ
・嫌いなもの　他人を不幸にする人

・容姿

ツンツンした短めの黒髪をしていて、それ以外にはこれと言って特徴がない平凡な容姿。体格は中肉中背だが数々の不幸に出くわしたり、ギルダーツとの修行の成果もありとても筋肉質。服装は学ランの様な服の下に赤色のシャツを着こんでいる。原作の冬服と同じ。

・性格

基本めんどくさがりで、面倒だと思ったことからは全身全霊を以て逃げようとする。その一方で、ギルドの仲間や知らない人が困っていたら、自身の危険一切不問で助けに行くような性格。たとえ敵でも説得すら試みるほど。そのような性格のため、本人は認めていないがギルドの仲間達からは『ヒーロー』と呼ばれている。一方、女性にどんどんフラグを立てるため、ギルドの男連中からは反感を買っている。

・住居

マグノリアの中にある普通のアパートに住んでいる。勝手にナツや

グレイたちが家に侵入して何か壊したり、ピンポイントで空き巣などに狙われるため家具は必要最低限しか置いていない。

・武器

右手に装備している。肘の中間あたりまで覆われているグローブを付けている。ＲＥＢＯＲＮ！のツナのボンゴレギアの形態変化のような武器。特殊な作りをしており、一動作で右手があらわになるようになっている。そして肘側には噴射口があり、あることをすることによってそこから？

・能力

「幻想殺し（イマジンブレイカー）」

それが異能の力なら触れただけで打ち消すことのできる能力。効果範囲は右手首より先だけだが、ミストガンの使う人を眠らせる魔法や雷神衆が使う眼から受ける魔法などの「上条当麻」として右手を含む異能の力も無意識的に無効化する。反面、回復魔法や強化魔法もすべて打ち消してしまう。そのうえ弱点も多々あり。

・相棒

インデックス（エクシード）

子供の頃に行き倒れていたインデックスを見つけ、助けたことにより懐かれ一緒に生活することになる。とんでもない大食いなので上条当麻のお財布に大きなダメージを与えている。不機嫌になると度々頭に噛みついてくる。

しかし戦闘の際にはとても頼れる相棒で、ピンチの時に幾度となく助けられている。

インデックス

・身長４５．５ｃｍ
・年齢６歳

・好きなもの　おいしい食事
・嫌いなもの　上条と一緒

・容姿
原作のインデックスを小さくし猫化したようなもの。服装は修道服。

・性格
天真爛漫かつわがままな性格で、子供っぽい言動が目立つ。語尾に「～なんだよ」、「～かも」などを付ける。上条の事は好いているが、恋愛感情は無く上条が女がらみで揉めていても平然としている。お腹が空いたり、上条が無茶なことをしたりしたら問答無用で噛みつく。
しかし上条と同じで誰かが傷つく事を嫌っており誰かを守るためなら自分の身を顧みない。

・住居
上条と一緒に住んでいる。しかし家事等はやらない（やってもロクなことにならない）

・能力
翼（エーラ）
背中から翼を生やして飛行する魔法。この魔法を使い飛ぶことので

きない上条を助けている。

第１３話～金髪の美少女～

三人称ＳＩＤＥ

～～魔法評議会会場～～

魔法評議会会場

そこは魔法界で起きた問題について話し合う場。今日もある議題について話し合っている。それは

「魔法界は常に問題が山積みじゃ」

「そして早めに手を打ちたいのが・・・・・

妖精の尻尾（フェアリーテイル）のバカ共じゃ！！」

一番偉そうな老人が言うと、周りもうなずく。しかし一人の青髪の青年だけが

「いいじゃねえか・・俺はああいう馬鹿は嫌いじゃねえが」

「貴様はだまっとれー！！」

怒鳴られた青年は、やれやれと言わんばかりに手を振りながら、深く椅子へ座りこむ

「やはり解散と言う道が一番手っ取り早いのでは？」

「・・・・しかしあそこには優秀な人材が多いという事も厄介じゃが、何よりあそこには奴がおる」

すると全員が真剣な表情へ切り替わる。全員がある一人の男を思い浮かべる

「もし妖精（フェアリーテイル）の尻尾を解散させて、あの男が闇ギルドなどに入るようなことがあればその危険度は計り知れない！！魔法界を揺るがすことになるやもしれん！！」

全員があの男について思案していると

「はっはっは！だから放っておけばいいんだよ。ああいうやつらがいないとこの世界は面白くない」

再び青髪の青年が笑いながら言う

・・・・・・

そして少しの沈黙が訪れ一人の老人がポツリと漏らす

「・・・・・・・・・まったく厄介な男じゃ。幻想殺し（イマジンブレイカー）」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

当麻ＳＩＤＥ

〜〜港町ハルジオン〜〜

自分が評議会の話の中心になっていることなんて知る由もなく、上条当麻はいつも通り

「ああもう！！不幸だーーー！！」

不幸だった。

「なんなんだよ！？やっと仕事が終わって今から帰りだーー！！って時に列車を間違えちまうんだよ！？、珍しく列車代をぴったり持っててラッキー！と思ってみればこうですよね！！やっぱり上条さんには幸運なんてありませんよねーー！！」

周りの目も気にせず、世界の終わりを見たかの如く倒れ伏していると

「それよりとうま〜お腹減ったんだよ！早く何か食べようよ〜」

インデックスがぐ〜とお腹を鳴らしながら呑気に言ってくる

「・・・インデックスさん？さっきも言った通りお金が無いんですよ・・・あの～物は相談なのですがあなた様のお金でどうにかなりませんかインデックス様？？」

「ん？お金ならさっきのえきべんっていうので使い切っちゃったかも！それよりご飯ご飯！！」

「ぎゃあーー！！やっぱりそういうオチかー！！はぁ・・　歩くしかありませんよね不幸だー・・・」

しょうがないから諦めとぼとぼ歩きだすと

がぶっ！！

「いてえーーー！！なんだ？？なんでいきなり噛み付いてくるんだよ！？？納得のいく説明を上条さんはしてほしいんでせうがーー！！」

「とうま！！私はお腹が減ったって言ってるんだよ！！なのにとうまが何も食べさせてくれないから噛み付くに決まってるかも！！」

頭に噛み付いているインデックスを払い除けようとするがなかなか離れてくれない

「だぁーー！！だから言ってんじゃねえか！！俺たちは今無一文なの！お金が無いんですーどんなに上条さんの頭に噛み付いたところ

でお金は出てきません！だから離れろーー！いや離れてくださいー」

空腹噛み付き暴力猫シスターが落ち着くまで上条の悲鳴が駅に轟くのであった

「うぅ頭が痛いー不幸だー！」

「そんなことより早く帰ろうよとうま！！このままじゃお腹が空きすぎて死んじゃうかも！！」

凶暴化したインデックスを何とか抑え妖精の尻尾（フェアリーテイル）に帰るためインデックスと歩いているところなのである。それにしても

「さっきから何の騒ぎなんだ？やけに騒がしいみたいだけど」

「たしかにそうかも。何なら聞いてくるんだよ！！」

言い終える前にインデックスはどこかへ向かおうとしていた女の人のところへ行っていた。そして少しの時間待っていると戻ってきた

「何でもさらまんだーがこの先にいるらしいんだよ！！」

「さらまんだーねえ・・・・・ってサラマンダー！？サラマンダーってあの火竜（サラマンダー）！！」

まさか火竜（サラマンダー）ってナツの探している竜のことなのか！？

・・・・・・・

「（いや無いだろー町にドラゴンなんていたらこんな軽い騒ぎで済むわけがねえだろ）」

俺が馬鹿らしい考えを切り捨てると

「ん？どうしたのとうま？？」

「ああいやなんでもねーよ。ただ火竜（サラマンダー）ってナツの探している竜なのかなーとか思ってさ。そんなことありえねーのにな。ハハ」

自分の馬鹿らしい考えをインデックスに教えるとなぜか目を光らせる。なんだが嫌な予感・・

「そのとおりなんだよとうま！ハッ！こうしちゃいられないんだよ！！どこかに行っちゃう前に早くナツに会わせなきゃいけないんだよ！！」

今までとぼとぼ歩いていたのが嘘に見えるほど素早く騒ぎの方へ飛んで行ってしまうインデックス

「って待てインデックス！！お前飛べるじゃん！？さっき飛べない

とか言ったの嘘じゃん！飛べるなら俺を持って帰って帰ろう帰りましょう三段活用！！騒ぎの所へ行くなんて不幸の香りしかしないのでせうがー」

と言ってもインデックスを置き去りにすると後で噛み付きどころの騒ぎじゃ無くなりそうなので嫌々騒ぎの中心へ足を向けることに

行ってみるとそこは

「・・・女の子ばっかりだな。なんなんだ？？？」

見渡すばかり女女女だった。男の子である俺にとってとても居づらい場所なのだったがインデックスを回収しないといけないので女の子の集団に入っていくと

パキンッ！

「（ん？なんか今右手が反応したような・・・まさかな。誰も魔法なんて使ってねーし勘違いだなそれよりも中の様子だ。どうなってんだ？？）」

何とか周りの女の子たちを退かしながら進んでいくと

「あなたがサラマンダーなの？？でも人間だよ？」

「そう！僕がサラマンダー！！ってなんだこの猫？ほら早くどっか行け！！」

「わー！？いきなり酷いんだよ！！ナツが「イグニールは優しいぞ

！」って言ってたのに！！とにかくあなたにはフェアリーテイルに来てもらうんだよ！！

・・・・・・・・・・・どうしよう？

やはりというべきか竜はそこには存在せず、いたのは年を取ったおっさんだった。そのおっさんは絡んでくるインデックスをめんどくさそうに退けようとしているがなかなか離れないインデックスにうんざりしていた。

「あ、すいません・・連れがお世話になりましたーではワタクシメはこれでー」

そう言いインデックスを掴まえ集団から離れようとしたが

「むっ！とうまどうして私を連れて行こうとしてるの！？なんであの人を連れて行かないんだよ！」

大声でしゃべりながらなかなかここを離れようとしてくれないインデックス。

「（頼むから早くここから離れさせてくれーー！！このままじゃ何やら嫌な予感がする）」

地面に張り付くインデックスに苦戦していると

「なんなのこいつ！！」

「ちょっとアンタ失礼じゃない！」

なぜか俺だけ周りの女の子にぼこぼこにされてしまう。・・・ぅぅ
なぜ？

「まあまあ彼だって悪気があったわけじゃないんだからね」

変なおっさんが女の子たちを宥めている。

・・上条さんは何も悪いことはしていないのだが

するとおっさんは何やらペンと色紙を出し始めた。そして

「ほら僕のサインだ友達に自慢するといい！」

なぜか俺にサインを渡してくる。いやいや

「・・・・え～とワタクシは知らないおっさんのサインなんていらないのでせうが」

と即答。すると

「なんなのアンタ！！」

「どっかいきなさい！！」

またしても女の子たちによってボコボコにされ追い出される

・・・・もう泣いて良いでせう？？

「僕はこの先の港に用事があるんだ！夜は船上でパーティをするからみんな参加してね！」

そう言うと火の魔法を使ってどこかへ飛んで行ってしまった。女の子たちは二つ返事でＯＫしているがインデックスは待ってー！と飛んで行ったおっさんを追おうと頑張っていた。

「・・・結局なんなのあれ？」

もう何が起こってるか考えるのが面倒になってきましたー俺が一人で肩を落としていると

「本当いけすかないわよね」

ん？何やら後ろから声を掛けられた気がする。振り向くと金髪美少女がそこにいた

「さっきはありがとね」

笑顔で言ってくる謎の金髪美少女

「（なんでだ？なんで俺はお礼をされてるんだ？？上条さんはそんなイベントやった覚えはありませんのことよ？？？）」

ますます状況がわからなくなり、とりあえず一言

「・・・・・不幸だ」

「ガツガツガツ！ヴァナハウウヒドバェ（あなたいいひとだね）」

「あーインデックス。仮にも女の子なんですから食べながら喋るのはやめなさい。それにしても、いいのか？食事代全部出してくれるなんて。上条さん達何もしてないんでせうが」

今俺たちはさっきの金髪美少女ルーシィと一緒に食事をしている

「それはいいんだけど、なんで当麻より猫のアンタの方が多く食べてるのよ！？」

「あー気にしないでくれ。いつものことだから、それでこれは何のお礼なんだ？？」

そこが気になる。さすがにこのままじゃ罪悪感が生まれてしまう。暴食シスターはそんなこと気にせず笑顔でガツガツ食べているわけだが

「あの火竜（サラマンダー）って男魅了（チャーム）っていう魔法を使ってたの！！この魔法は人の心をひきつけることのできる魔法なんだけど何年か前に販売が禁止されてるんだけど・・・あんな魔法で女の子たちの気を引こうなんてやらしい奴よね！！」

「（へぇーそんな魔法があるのかーって待てよ！これを使えば上条さんもモテモテに！！・・・ 無理ですよねわかってますよどうせ右

手で破壊されますよねーはぁ出会いが欲しいなー）」

今考えていることを妖精の尻尾（フェアリーテイル）の連中が知れば一発パンチをぶち込んでいただろう。特にミラやエルザがそれを聞けば本気で襲ってくるだろう。なんてこと上条にわかるはずも無く

「あたしはなんか知らないけど当麻に触られた瞬間魔法が解けたって訳。たぶん驚いたショックで魔法が解けたんだと思うけど・・・こー見えて魔道士なんだー」

あ・・・あの時右手が反応したと思ったらルーシィに触れたから反応したわけか！

「へーそりゃすげえな！」

率直な感想を述べる。なぜなら俺には魔法は使えないのだから

「まだギルドには入ってないんだけどねーあギルドっていうのはねー」

それからルーシィはギルドがどういうところかとか、自分には入りたいギルドがあるなどすごい勢いで語ってくる。俺がルーシィの勢いに尻込みしていると

「あーゴメンねぇ魔道士の世界の話なんてわかんないよねー」

・・・・いやこれが知ってるんですよ。嫌っていうほどの魔道士達と戦ってきたりとか、評議会から怒られたりだとかいろいろやって

ますからねーははは不幸だー

俺が不幸な思い出に浸り泣きたくなっているとルーシィは俺の右手を見ながら

「あれ？でもグローブ付けてるってことは当麻も闘うの？もしかして魔道士なの！？」

ルーシィが身を乗り出して聞いてくる。

・・・・・・・

その体勢だとルーシィの豊満な胸がチラチラ見えてしまう。少しばかり視線を釘づけにされたが健全な男の子である上条さんにとっては刺激が強すぎるので強引に体ごと目を逸らす

「ん？どうしたの？」

気づいていないのかルーシィが不思議そうに俺を見つめてくる。これはきついー

「あのですね上条さんは別に見たかったとかそういうのじゃなくてですねたまたま視線に入ってしまったというかなんというかとにかくその体勢はやめていただけないでしょうか姫？」

息継ぎなしで焦りながら言うとルーシィはまだわかっていないのか首を傾げながら椅子へ座った

「それで当麻は結局魔道士なの？」

「ああ俺は違うぞ。魔道士でもない普通の人間ですよー」
ありのままを答える。するとルーシィは少しがっかりしていた
「それじゃあ私はもう行くね。インデックスもあまり食べすぎないようにねー！」
そう言いお金を机に置き出口へ向かっていく
「ありがとなルーシィ。今度会ったらお返しするからなー！」
「ありがとなんだよ！！ルーシィはいい人なんだよ！！」
俺たちがお礼を言うとルーシィは微笑みながら出ていった
「いやーいい人がいるもんだなーインデックス」
「ごく！！うん、当麻もああいう優しい人にならなくちゃいけないんだよ！！」
「（それにしても入りたいギルドねーまっ妖精の尻尾（フェアリーテイル）ではねぇだろ。あれだけべた褒めしてたからなー妖精の尻尾（フェアリーテイル）に褒められる所なんてありません！）」
しかし上条は知らない。これが俗に言うフラグだという事を（まあ彼にフラグを立てるなと言う方が無理な話なのだが）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0877y/

とある魔法の妖精尻尾（フェアリーテイル）

2011年11月27日08時45分発行